390.4
Ta59

米英の反撃と大東亞決戰

竹田光次著

0055474000

0055474-000

３９０．４－Ｔａ５９ウ

米英の反撃と大東亜決戦

竹田光次・著

翼賛図書刊行会

昭和１７

AJA

917
427

東亞決戰

贊圖書刊行會發行

米英の侵略と大東亞決戰

竹田光次著

翼贊圖書刊行會發行

917
427

390.4
TA59

552

米英の反擊と大東亞決戰

大本營陸軍報道部
陸軍少佐 竹田光次著

翼贊圖書刊行會發行

917
427

大東亞戰爭に賜りたる宣戰の詔書

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各〻其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑〻東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義トスル所ナリ

今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府最ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ鬩ク悔ユ米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益〻經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

目次

はしがき……一
一、大東亞戰爭の本質……一
皇道宣布の戰ひ……一
世界戰爭としての本質……三
皇國存亡の一大決戰……九
大長期戰の考へ方……一三
二、大東亞戰爭をめぐる國際情勢……一七
敵側の情勢……一七
アメリカ……一七

アメリカの軍擴……一八
アメリカの對外工作……二二
イギリス……二八
イギリスの軍備……三二
イギリス屬領の動向……三三
インド　濠洲　カナダ
重　慶……三八
豫想される敵の企圖……四一
別表(1)第一次ソロモン海戰の戰果……四六
別表(2)……四七
別表(3)……五二
樞軸側今後の作戰……五八
獨ソ戰局の推移と日本……六二

獨ソ戰局……六六
日ソの將來……六八
三、大東亞建設の方策……六八
建設の指導理念……七二
大東亞各地域の價値と建設狀況……七五
滿洲國……七七
新支那……九〇
南方各地……九一
四、重要な我が戰力の昂揚……九一
一、人的國力の現狀……九一
兵力の推移……九三
勞力の推移……

人口の推移……九四
二、物的戰力の現狀……九六
石油……九八
鐵鋼……一〇〇
船舶……一〇二
米……一〇三
五、死活戰に對する我等の覺悟……一〇五
○附錄
東條首相訓示……一〇八
東條陸相訓示……一一三

はしがき

昭和十六年十二月八日、畏くも敵米英に對する宣戰の詔書を拜して以來、早くも一年、戰爭は正に第二年に入らうとしてゐる。

今、ここに過ぎにし大東亞戰爭第一年を回想してみたならば、吾々は轉た感慨無量なものがある。

開戰以來、御稜威の下、皇軍は至る處に敵を擊滅し、武威を中外に宣揚し、戰前敵が、我慾をほしいままにしてゐた東亞の地は今や全くわが手に歸し、世界をわが物顏に橫暴の限りを盡してゐた彼等の優越感は忽ち剝奪され、日本は啻にアジアの指導者たるのみならず、世界の光として、世界新秩序建設のために重大なる役割を果す實力のあることを世界に認めさせたのである。皇國の歷史永しといへ、未だ曾つてかくの如き痛快な事はない。彌榮えゆく皇國民だけ

に感じられる幸ひであり、喜びである。

かくして、戰爭第一年は戰勝に明け、戰勝に終り、ためにわれら國民は明朗な一年を過し、早くもここに戰爭第二年目を迎へることになつた。

しかし、戰爭第二年、戰局の前途が、如何に推移するものか、全く豫斷は許されない。

もとより神州日本の進むところ、常に天佑神助あり、戰つて勝たざることはないであらうが、しかし今次大東亞戰爭の敵は大敵であるとしても決して小敵とはいへない。三世紀の久しきに亙つて世界を制覇し來つた物と力をもつた相手である。それが、今や、日本に對する輕侮の心を一掃し、對日敵愾心の昂揚と軍備の充實强化につとめ、もつて敗戰の不利な頽勢を挽回しようと必死の足搔をみせてゐるのである。勿論恐れるには足りないが、確かに侮れない强敵である。

翻つて、戰局の前途に對し、わが戰力が如何に推移するであらうかを考へてみるに、大東亞を制した帝國の國力は比類なきまでに、飛躍增强せられて、到底昔日の尺度をもつて論ずることはできないが、しかし、當面する戰爭遂行に必要な、わが戰力の各種要素の現況を檢討してみれば、斷じて樂觀を許さない實情である。

以下、大東亞戰爭の本質をまづ解說し、更に世界情勢の推移を省察しつつ、正に迎へんとする大東亞戰爭第二年の前途を洞察し、今後に處すべきわれら國民の覺悟の資に供することにしよう。

一、大東亞戰爭の本質

皇道宣布の戰

大東亞戰爭の本質の第一は、大東亞戰爭は皇道宣布の戰ひであるといふことである。

古來、わが國の戰爭は、一貫して、八紘爲宇の皇道精神に基づいて、戰爭指導が行はれてゐる。特に最近、滿洲事變、支那事變、ひきつづいての大東亞戰爭となつて、その戰爭指導精神は、最もはつきりと示されるに至つた。今日まで、各地に各種の戰爭が行はれてゐるが、破壞のための戰爭、物を奪り合ふ戰爭でなくて、眞に道義に立脚した、新しい立派な世界を產み出さうとする戰爭

目的をもつた戰爭は、日本の戰爭以外にはない。

吾々は今次の大東亞戰爭も正にこの皇道宣布戰だといふ信念をいよいよ深め、皇謨翼贊のために身命を捧げる强い決心をもたねばならないのである。特に、この戰爭は長期化し、一勝一敗、各種の困難が前途に横はつてゐるのであるから、これを打破するためには、確乎たる信念をもたなければならない。その信念の基礎は、一に、從來米英の不當な搾取壓迫の下に喘いでゐた東亞の諸民族はもちろん、世界中の國々の民族に各々その所を得させ、世界を正しく明るくせんとする八紘爲宇の精神を具現するために、戰つてゐるのだといふところになければならないのである。

世界戰爭としての本質

第二は、大東亞戰爭は世界戰爭であるが、この世界戰爭の意義・目的・使命は

何處にあるかといふことである。

前のヨーロッパ大戰、すなはち二十七、八年前に、ヨーロッパを中心として四年の長きにわたつて戰はれたこの戰爭は、六百萬の戰死者、一千萬の負傷者を出し、四千億圓の戰費を、土と化したのであつた。この戰爭が終つた時、世界各國は戰爭に倦き、吾々の生きてゐる間には再び戰爭を起したくないと、戰爭を呪ひ、それに代つて平和熱が瀰漫し、爾來軍縮會議・平和會議と各種の戰爭防止の手段方法が講ぜられた。しかし、それから僅か二十數年後の今日、世界大戰爭は再び吾々の眼前に展開した。そこで吾々はこの世界戰爭の意義は一體どこにあるのかといふことを檢討する必要が生ずるのである。

以下それを簡單に述べよう。

その一は、政治的に見た意義である。

ヴェルサイユ平和體制、いひかへれば米・英・佛といふ前ヨーロッパ大戰において戰勝を得た國々の世界支配體制には不合理が存在してゐた。そこでこれを打破して、各民族・各國家が各々その能力に應じて天分を發揮し得るだけの公平なる分配がなされねばならないことは、これは自然の法則であり、これがこんどの戰爭の勃發した重大な原因の一つとなつたのである。

その二は經濟的意義である。

最近各國家、特にアメリカ・日本が發展して、從來のやうに歐洲を中心として、植民地の搾取による通商貿易によつて、自分だけが利を占めるといふ經濟の組織は次第に變化した。特にイギリスが、自分の勢力範圍に立て籠つて利益をまもる、すなはちブロック經濟を採用して以來は、ますます世界の情勢は對立化して來た。日本・ドイツ・イタリーといふやうなこれから發展してゆく國々

にとつては、到底自存自衛することが出來なくなつて來た。この舊體制を何とか建て直さなければやつて行けないといふ生存のための必須の要求が起つてきた。すなはち持てる國がブロック組織にした經濟體制をば打破して、强國を中心として、その隣近所の民族が相依り相扶けて各々共榮圏を組織し、各共榮圏は互にブロック經濟で對立するのでなく有無相通じ、かくして世界が共存共榮の實を擧げるといふやうな、新しい、合理化された經濟體制にする、換言すれば皇道原理による經濟體制を打ち建てるといふところに、今度の戰爭の經濟的原因があるのである。

その三は、思想的に見た意義である。

すでに一般にいはれてゐるやうに、今日迄の自由主義文化は、その發展の過程に於ては一つの使命を持つてゐたが、それもやがて爛熟し、却つて世を毒する樣になつた。それは何かといへば、物質萬能の文化であつて、特に近代の資

本主義經濟が發達してからは、社會の問題がすべて金融に左右され、時の政治でも宗教でも教育でも、一切のものが金融の前には頭を下げなければならない樣になつた。今までの世界は唯物主義萬能・金錢萬能の時代であるといつてもさしつかへない。今日までは米英が金で世界を支配した時代であるといへよう。その唯物主義のきはまるところ、各地に戰亂が起り、互ひに相食んで血なまぐさい戰爭をつづけることになつた。資本主義經濟を敵とする共產主義が生れ、思想の軋轢が深刻化した。この共產主義も全く唯物思想そのものに外ならない。この自由主義は米英の世界制覇政策の裏付けとして、共產主義はソ聯の世界政策を裏付ける思想として、共に政治的に極めて巧妙に利用されてゐたことを見逃してはならないのである。そしてこれを救ふために、どうしても日本の皇道のやうな道義を中心とした新らしい世界をつくらなければならなくなつたのである。元來、東洋は精神方面では西洋人では分らない獨特の幽邃なる文化をも

つてゐる。これに、近代西洋に發達した科學・物質文明をとり入れ、日本の皇道を中心に物心一如に合體した文化をつくること、これがこの戰爭のもつ精神的・思想的な意義なのである。

かういふやうに、政治的に經濟的に思想的に世界の歴史を一轉する大きな意義をもつ戰爭が、現に吾々の眼前に戰はれてゐる。これが大東亞戰爭の本質なのである。さういふ大きな意義をもつて、吾々は戰ひつつあるといふところに、まづ着眼することが必要である。そして武力的には敵は我れよりも優勢であるかも知れない。經濟的にも我れに優つた力を持つてゐるかも知れないが、思想的、すなはち根本的なもの、本質的なものにおいては、我に正義がある。斷然敵に優つてゐるのである。この强い正義觀に立つて、喜んで御奉公する、君のため國のために盡すといふ世界觀が生れてくるのである。

皇國存亡の一大決戰

第三は、大東亞戰爭は日本死活の戰爭であるといふことである。

吾々の父祖が戰つた日清・日露戰爭當時を回想するに、そのいづれにおいても、明治天皇陛下を始め奉り時の爲政者は日夜心膽をうち碎き、何とか戰爭を回避して國是を貫徹しようと努力されたが、つひに事成らずして戰端が開かれた。國民もよくその氣持をわきまへ、直に擧國一致の態勢をもつて戰ひ、つねに精神力を最高度に發揮して、寡をもつて優勢を破り、今日の世界的日本をつくつて吾々の時代に引繼いでくれたのである。今回の大東亞戰爭においても、その間の經緯は日清・日露戰爭と同樣、またはそれ以上のものがある。

昨年ほとんど一年間繼續された日米交渉を中心として、その經緯の眞相を靜かに檢討してみると、まことに恐れ多い話であるが、　天皇陛下を始め奉りそ

の樞機に參畫した人々は眞に心膽を打ち碎いて努力され、つひに事志とちがつて開戰のやむなきに至つたといふことが、よくわかるのである。今日では防諜のため、日露戰爭の開戰前のやうに國民の一人一人までが明からさまに知ることが出來なくなつたのは誠に已むを得ないとはいへ、本質的なものは常に明示されてゐた。

最近までのわが國の國是は、周知のやうに支那事變を速かに完遂して、大東亞共榮圈の確立を期することにあつた。支那事變を速かに完遂し大東亞共榮圈の確立を期せんとす——これは大東亞戰爭開戰前におけるわが國の國策であり、わが國朝野を擧げての最大關心事であつた。一切の方策は支那事變の解決に資せんがためにとられた。日英會談といひ三國條約の締結といひ、日英米國交調整の試みといひ皆然りである。

日米國交調整は支那が米國の傀儡(くわいらい)であるところよりして支那事變の元兇(げんきよう)に向

つて外交工作を進め、もつて事變解決の一助とする一方、險惡化する太平洋の平和維持のため兩者の妥協點を見出さんために試みられたものである。わが當局者はこれが成立のために全精力を傾注し、誠意を披瀝して相手の說得に努力した。しかるに横暴なる米國政府當局者は、これを見て我弱しとなし、却つて暴慢無禮な態度に出て來たのである。しかも彼の魂膽なるものは、實に我が支那事變處理の根本的否定にあつたのである。

物の關係のみから見た日米戰爭は臺所元へ切り込むといふか、兵站(へいたん)基地に向つて戰爭する樣なもので非常な無暴なことだとも見られる位であつた。當時東京に駐在する第三國、殊に弱小國の外交官は日本が米國と戰爭するのは日本の自殺だと笑つたといふ話もあるくらゐである。たしかに大東亞戰爭開戰前における彼我の戰爭物資を比較したならばそれほど迄に懸隔(けんかく)が甚しかつたのである。されば我が政府當局としても眞劍なる檢討を加へ、日米戰爭は彼の挑戰に

より我が生存が不可能であるといふ結論に達した絶對絶命の場合のほかは、極力回避する方策で進んでゐたのである。しかるに先きには七月二十六日對日資産凍結令を發動し、軍事上の脅威と相俟つて、着々わが生存を脅威し始めたのに加へ、その年の十一月二十六日には突如支那事變について即時全面的撤兵を要求するといふ傍若無人の態度に出たのであつた。**日米戰爭もとより欲するところではない。しかし日米戰爭回避のため支那事變を賣ることは出來ない。**第一支那事變に失つた十萬の尊き英靈に對し何の顏があらう。如何なる理由、如何なる事態があるとしても、これはどうしても許さるべきことではない。萬策は盡された。洵に已むを得ない事態になつた。かくなつた以上、自存自衞のため蹶然起つて一切の障碍を破碎するより外に道がないことになつた。**坐して犬死するよりも斷乎として起ち上り死力を盡して祖父の地を守らんとの悲壯なる決意の下に大東亞戰爭は開始せられたものである。**眞に皇國存亡の戰爭であ

り、重大時局であることを夢寐にも忘れてはならない。

大長期戰の考へ方

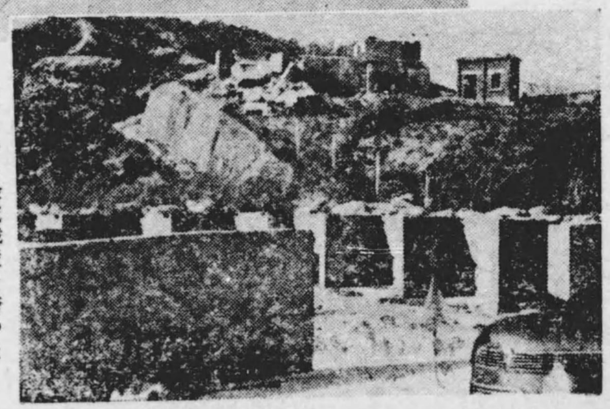
第四は、大東亞戰爭は短期戰の連續であり、一大長期戰であるといふことである。

これはくわしく說くまでもなく、近代戰は武力を中心として一國の總力を擧げての戰ひである。敵は世界的に覇を稱へ、特に物質力の世界に冠絶してゐる米英であつて、しかも戰場は全地球にわたつてゐる。今日の兵器をもつてしても、太平洋を橫斷して一擧に敵と決戰をすることは、まづ不可能である。武力戰的に見ても、即戰即決はできない。ましてや武力以外に經濟力、思想力等あらゆる部門を動員して戰はなければならない今次の戰爭は、非常な長期にわたり、おそらく吾々の時代のみでなく、吾々の子・孫の時代にまで續けられるも

のと考へなければならないのである。**しかし、こゝに長期戰の意義について考へなければならないことがある。**それは長期戰とは武力戰もあるが經濟戰、思想戰で長期に亙つてヂワリ〳〵と戰つて最後の勝利を得るとか、米國は一九四四年の軍備充實計畫なるまでゲリラ戰だけでやると考へて、呑氣に悠然と構へてゐてはならんといふことである。これは現に戰はれてゐるソロモン作戰が示してゐる。このソロモン作戰は今や日米の國運を左右する程にまで發展してゐる。すなはち一大決戰である。卽ちこの作戰から考へても分るやうに今後の戰爭は決戰の連續であり、一度これに不利を見たならば、爾後の決戰にも極めて不利になるともいふことである。戰爭は長期戰であるが、これは決戰の連續である。

我が軍の猛攻に潰え去つたチヤンギ要塞の英38サンチ砲の殘骸

あの日の激戰の跡を偲ぶブキテマ高地



在りし日金城鐵壁を誇つた英の東洋據點香港要塞の廢墟

二、大東亞戰爭をめぐる國際情勢

まづ敵側がどういふ情勢にあるかをみよう。

アメリカ

戰爭開始以來、米國政府はあらゆる部門に强權を發動し、これを日に日に强化してゐる。民需の統制を强化するとか、或ひは非常權限の發動をするとかいふ具合にして、およそ今までのアメリカの政治のシムボルであつた自由といふものは見たくとも見られないといふくらいに打つて變つてきた。もちろんこれに對してアメリカ國民の間には相當不平不滿をもつ者もあり、工場勞働者の罷

業等も頻發してゐるがしかし、これがアメリカの大勢を支配してゐると見ることは誤である。アメリカ人はやはり、この世界戰爭に勝たなければアメリカの繁榮は期されず、アメリカの繁榮がなければアメリカ人の幸福もないといふ考へ方に立脚して、ルーズヴェルトのやり方に氣にくはない所はあるが、これに反對しては戰爭のためにならないといふ考へから、とにかくルーズヴェルトの施策に隨ひ、日に日に戰時態勢を強化してゐると見るのが至當である。

アメリカの軍擴

今日吾々が一番注意しなければならないことはアメリカの軍備の擴充狀況である。

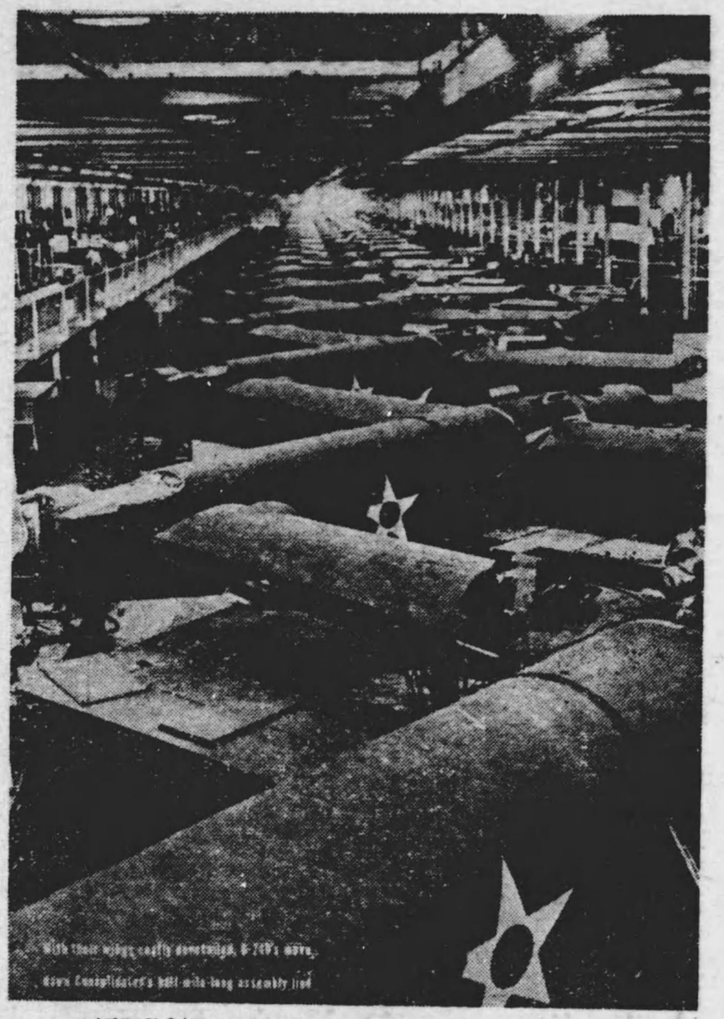
現代戰の主體は飛行機である。アメリカの戰略上最も得意とするものは、こ

の飛行機である。質もよい。技術も相當である。現在もつてゐるのは、大體一萬四、五千機と推定される。そのうち第一線機は約三分の一位であらう。飛行機の生產能力は、本年五、六月頃で三千五百機內外であつたといはれるが、それが今年末には、六、七千機に達し、來年の春頃には一萬二千機位に達し、來年の末、明後年の初頃には恐らく二萬機位に達するであらうとのことである。

特に重爆擊機、大型輸送機に力を入れて整備してゐるのは、將來廣い太平洋を渡つて各地に兵力を輸送し、或ひは日本を空襲するのに使ふのではないかと判斷されるのである。

次に海軍艦艇の狀況はどうか。

大東亞戰爭開始以來アメリカの擊沈された艦船は、約五十萬噸であるが、開戰後新しく建造されて就役してゐるものが二十萬噸足らずあるから、現在保有の噸數は大體百二、三十萬噸程度ではないかと判斷される。航空母艦は、今年



米國製B24D重爆擊機、カリフオルニヤサンデイゴーコンソリデーデツト製作所

はまだ建造時日が足りないので、純粋のは少いであらうが巡洋艦とか商船を改造して航空母艦に代用してをり、この數ははつきりとは判らないが、全部で**八十隻**内外ではなからうかと考へられる。潜水艦は現在月に二、三隻の速度をもつて竣工してをり、航空母艦の建造は、來年には十五、六隻、明後年になると三十隻、その翌年には四十隻位に達するであらうとみられてゐる。

商船は、現在アメリカのもつてゐるのは七百萬噸内外であらう。大統領の教書によると約一千萬噸の建造目標であるが、實際には明年末までに四百萬噸程度の建造能率を發揮するにすぎないのではないかと考へられる。

陸軍は、大東亞戰爭が始まつた當時、約百五十萬の兵員であつたが、目下これを二百三、四十萬に擴充してゐる。戰前は四箇の裝甲師團をもつてゐたが、現在は二倍の八箇になつてゐる。戰車の生産能力は、現在月千五百臺以上であらう。

以上のやうに、**アメリカは全生産能力を擧げて軍備の擴充を行つてゐる。**本年は準備を整へる期間が少いため、あまり生産量を擧げてゐないが、來年はこれが二倍になり、明後年は三倍に達すると見られる。アメリカのこの尨大な數字を見て今さら驚くやうな吾々ではない。今まで隨分永い間、米英の物の數で驚かされて來た吾々も今度の戰爭で、これはすつかり精算した。しかし油斷は大敵である。これに對して吾々も十分の覺悟と準備をしなければならないのである。

アメリカの對外工作

次にアメリカは對外的にどういふ工作を行つてゐるか、その概要を述べてみよう。

アメリカの對外工作は一面、戰爭自給力の增强のために行はれる一方、日獨伊に對する政略、戰略的な包圍政策である。すなはち長期持久戰術の常道を行つてゐるわけである。その現はれが對南米工作であり、對獨第二戰線の構成であり、ソ聯、重慶援助政策である。

第二戰線の問題　アメリカが目下一番氣に病んでゐるのは、ソ聯から要求されるドイツに對する第二戰線の構成問題である。これはイギリスも同樣であるが、實質的には現在の狀況においては餘り大きな兵力を送ることも出來ず、特に船が不足してゐる關係から、こゝ當分は適切有效な第二戰線は構成できないものと思はれる。去る十一月八日、米英軍は西アフリカの海岸に上陸、フランス領に不法侵入を敢行した。これに對しペタン政府は斷乎國交斷絶を聲明した。米軍の意圖は今後の戰局の發展を見なければ分らないが、恐らくアフリカの侵入し易い所へ先づ足場を作り、北アフリカへ更に手を延ばし、出來るならば北アフリカの獨伊軍を叩き、やがて地中海を制しようといふ考へでやつたこ

とであらう。今日、吾々が獨伊軍に望むことは、この米英軍を殲滅してくれることである。西アフリカばかりでない。エジプト、西アジア（イラン・イラク・シリア）方面に對しても飛行機の補給、兵力（特に機械化部隊）の增强といやうなことは相當力を入れて實施してゐる。以上は英國に對する援助でもあり、獨伊に對する包圍政策でもある。この方式は日本に對してもとられてゐる。すなはち濠洲、重慶及びソ聯への援助を强化し、對日包圍陣政策、戰略を行つてゐるのである。この意味において消極的な第二戰線を構成してゐると見られやう。

對樞軸共同戰線　アメリカは、日獨伊、特に日本に對して、反樞軸國を聯合させて一つの戰線を構成し、特にその統帥を統一しようと、かねてから努力をしてゐる。本年三月三十日、ワシントンに太平洋軍事會議を設立し、これにはアメリカ・イギリス・支那（宋子文）・ニュージーランド・濠州・蘭印（オランダ）・カ

ナダの七ヶ國の代表が參集した。そこでは太平洋の現狀をめぐる共同作戰を中心に協議をしてゐるが、その狙ひとするところはアメリカがその指揮權をとることであつた。しかしながら、第一次世界大戰の時におけるやうにうまく聯携協同が出來てゐないので折角會議は開いてもほとんどその實施が出來ず、ちりぢりばらばらな實情である。その一つの現れは、ソロモン海戰に續く去る十月の南太平洋海戰の結果でも窺はれる。すなはち、南太平洋海戰で、アメリカ海軍は後に述べるやうに帝國海軍の前に大敗北を喫したが、その際、米國と濠洲は盛んに敗戰の罪をなすり合ひ、ニューヨーク・タイムスが、「濠洲は南太平洋海戰に何らの働きもしなかつた」と述べたに對し、濠洲のサン・ピクトリアル紙は、「南太平洋海戰は米國のみでやつたのではない、かかる記事は濠洲を侮辱するものである」とやり返し、また、濠洲のクリスチャン・モニター紙は「濠米の作戰方針はとかく二つの系統に分かれて食違ひを生じてゐるが、これはワ

シントンの責任である」と米當局を非難した。これに對して南太平洋方面總司令官マックアーサーは「米當局の出す命令と濠當局の出す命令は、すべて自分の手許において統一してゐるから兩者の不統一といふやうなことはない」と苦しい辯明をなさざるを得なかつたが、これなどは、敵側の聯携がしつくり行つてゐない一例とみられるのである。また七月初め、ロンドンにおいて軍事祕密會議を開き、その結果ソ聯援助のため特使ウイルキーを派遣し、ウイルキーは、歸路西アジア・重慶・トルコなどを廻つて、共同戰線の強化に努めたが、これも實質的には別に得るところはなかつた模樣である。

對印態度――インド問題についても、アメリカは非常な關心をもつてをり、ハル國務長官は八月十八日「インド問題については特に細心の注意を拂つて居り、近く特殊任務を帶びた技術者(技師)を印度に派遣する」と發表した。アメリカはかねて、アメリカ以外の問題に對しては手を出さないといつてゐたが、

現在では全くその精神をうち忘れ、あらゆる方面に日に日に積極的な進出をしてゐる現狀である。

中南米工作――中南米に對しては、どういふ工作をしてゐるかといふと資源戰の見地からと戰略態勢强化の必要からとで盛んに抱込み政策を行つてゐる。中南米が米國につくか、つかぬかは米國の世界戰爭遂行に影響するところが相當大きいので、アメリカは何とかして南アメリカを自分のものにしたいと、つねづね苦心慘澹してゐる。去る八月二十二日、ブラジルの船が數隻沈められたが、これはドイツの潛水艦にやられたのだといふ理窟をつけて、ブラジルはつひにドイツに對して宣戰を布告した。これはもちろん米國の工作による。その機に乘じて、アメリカはブラジルに海軍基地を獲得して、飛行基地を擴張した。また、かねて中立を堅持してゐたチリーやアルゼンチンにもあらゆる謀略工作を行ひ、チリーは去る十月二十日內閣の總辭職を行ひ、かねて樞軸的色彩が濃

いといはれてゐたハルパ外相が退陣し、新たに親米内閣が生れるに至つたが、この裏にも多分にアメリカの手が動いたといはれるのである。その他、アメリカは南方地域を日本に占領され、ゴム、錫その他の南方特産物の輸入が杜絶したために、これを南米から得なければならないといふので、最近ブラジルをはじめ各國との間に農業資源に關する經濟協定を締結し、特にゴムに重點を置いて工作をしてゐる。

イギリス

老大國イギリスの運命は決し、開戰以來連戰連敗、國勢は日に傾いてゐた。ところが最近に至つて漸く米軍の來援を得、一方歐ッ方面の戰況の持久化により、獨軍の對英壓力が緩和されることになり、國內生產力の增大と相俟つて、形勢は以前より若干良くなつたといはれ、これは最近各方面の戰況にも現はれ

北亞戰線に活躍する獨伊軍輕歩兵部隊

てきてゐるやうである。固よりこれは局地の變化に過ぎず大勢には變りないものである。

まづ各方面の戰況から述べてみよう。

北阿の戰況——北アフリカ方面における戰況は、昨年の末以來獨伊軍が着々と攻勢に成功し、今年の春先にはエジプトの國境を突破して、アレキサンドリアの西方二、三十里にあるエル・アラメインの線にまで進出し、エ

ジプトもすでに危いといはれるまでにイギリス軍に不利であつた。イギリスとしても、この狀況を放つておくことはできない。特にスエズといふ重要な地點があるので、これに對して南阿或ひは西アジア或ひは本國から飛行機をはじめ兵力の增援を行つた。その兵力は飛行機約二千機、地上部隊約三箇師團といはれ、必死の防戰を續けたのである。それがために、戰局はエル・アラメインの線で停頓したままこの秋に持越されるに至つた。最近の戰況は去る十月二十三日夜以來、英軍は大規模な反攻作戰に出で、火砲と戰車部隊をもつて獨伊軍に猛烈な攻擊を加へ、一方、マルサ・マトルーに敵前上陸を試みたが不成功に終つた。しかし、英軍は例の執拗さで、なほ反擊を繰返へすものと見られるので、この方面の樞軸軍も全く油斷はできないものとみられるのである。マルタ島を中心として地中海におけるイギリスの海上勢力がまだ相當强く、樞軸側の補給が十分に行かないのに對し、イギリスの方は希望峰を廻れば大體確

實に補給ができるといふ、補給の良否が戰局に非常な影響を及ぼす戰ひである。

ディエップ上陸作戰——去る八月十九日の拂曉、北部フランスのディエップの海岸にイギリス軍は上陸作戰を敢行した。これはおそらく、ソ聯に對する第二戰線構成の一つのゼスチュアだつたらうと思はれるが、ドイツ軍の防戰によつて瞬く間に擊退され、全く失敗に終つた。この作戰による聯合軍側の損害は、ドイツ側發表によると戰死三千五百人、捕虜千八百人(大部分はカナダ兵)、戰車二十八、飛行機八十三、驅逐艦四、水雷艇三、その他護送船、輸送船多數擊沈といふ慘憺たるもので、この一戰によつて英國をはじめ聯合國は、歐洲大陸上陸作戰が如何にむづかしいかを知つたのであつた。

マダガスカル上陸作戰——英軍は、この春佛領マダガスカル島が、樞軸側の基地として利用される危險があるといふ理由の下に、同島に不法上陸し、北部の

要港デュゴ・スワレズを占領したが、更に九月十日、同島の西岸にあるアンバジア、マジュンガ、モロンダヴアの各港を攻撃し、陸戰隊を上陸させ、同島の首都タナナリヴオに進擊し、同二十三日つひにこれを占領し、マダガスカル全島をその手に收めた。

對獨爆擊——獨ソ戰鬪でドイツの飛行隊の主力が東方戰場に向けられてゐる隙に乘じ、イギリスは相當執拗にドイツの西部工業地區に對して空襲を行つてゐる。しかしこれは大した効果はない。

以上のやうに、イギリスは各地の戰線において小規模な反擊作戰に出る程度で、戰勢を挽回する迄には至つてゐない。その能力がないからでもある。

イギリスの軍備

陸軍は、すでに四百萬から動員してをり、最大限までの人を徵用してゐる。

男子といふ男子はほとんど兵役または後方の勤務につき、**國內は大部分女子が代つて經營してゐる狀況である。**期待されるのはインド、濠洲、カナダの植民地軍であるが、これも本國に呼び寄せることが出來ない現狀にある。したがつて、兵力の增强は困難であり、できても一割程度であらう。

飛行機は、現在月產約一千三百機の生產能力をもつてゐる。また海軍は依然としてドイツに對し優勢なものをもつてをり、これで大體態勢を保持しようと努力してゐる。

したがつて、イギリスの軍備は、大體において現狀を維持するか、または若干程度向上するであらうと考へられるのである。

イギリス屬領の動向

次に、イギリスの屬領の動向はどうか。

インド――インドは、今次の歐洲戰爭が始まつて以來、イギリス本國のために、後方兵站基地の役割をつとめてゐた。大東亞戰爭が起つた當時も、インド民衆は比較的おちついた靜觀的態度をとつてゐたが、その後帝國陸海軍の作戰がインドに迫り、陸軍がビルマを占領し、海軍がインド洋に進出して直接インドを攻擊するやうになつてから、情勢は俄然沸騰してきた。卽ち七月十三日、ワルダで開かれたインド國民會議派運用委員會では、英政治勢力の卽時インド撤退の要求と、不服從運動の開始を結びつけた決議案を採擇し、これを八月七日、八日にボンベイで開かれた全印委員會に附議、三四七對一三の絕對多數で可決したが、かういふ重大な問題が、かくも多數で可決されたことは、全く今回が始めてのことである。いかにインドの民衆が獨立運動に熱意をもつてきたかといふことが、この數字によつてもわかるのである。これに對して、英インド政府は、八月九日、突如ガンジー、ネール、アザットなどの領袖をはじめ多數の

幹部を逮捕拘禁した。このためにカルカッタ、ニューデリー、カウンポール、ルクナウ、アーメダバッド、プーナ等インドの各地に暴動が起り、民衆と官憲との間に爭鬪が惹き起されて、それが今もなほ續いてゐる。

このインドの獨立運動に對する見方であるが、インドは國情が極めて複雜であるため、簡單に結論を下し得ない。ただ大體の動向として、インド人は獨立に對して、非常に熱意をもつてきたといへる。しかし、獨立のために血を流すことは欲しないといふのが、インド人の本心らしいのである。その理想は、イギリスが自主的に軍隊を撤退してくれることである。ドイツがイギリスを屈服させれば、イギリスは自然にインドから撤退する。それにも一つの期待がかけられてゐる。このやうに、**他力によつて獨立をなし遂げようといふのが、インド人の本當の肚ではないかと思はれる。**そして反英運動もインド政府の果斷な要人幹部連の一齊逮捕によつて、その繼續が困難になるのではないかとみられ

るのである。それに、今回の國民會議派の運動は、從來に見ないほど組織的に行はれ、その將來の動向は決して輕視を許すべきではないが、未だ學生と勞動者の運動に過ぎない。一般大衆である農民層、特に回教徒の組織してゐる軍隊には何等の動搖や影響を與へてゐないので、靜かにこれを觀察すると、まだ眞にインド獨立の態勢にはなつてゐないのではないかともいへるのである。また會議派に反對してゐる回教聯盟といふやうなものがあるので、**インドの獨立問題は前途に相當の波蘭曲折を含み、これにあまり早急な期待はかけられない狀況である。**イギリスのインドに對する方策としては、大體、前にクリップスが持つて行つた案を根本方針として堅持し、これに反對するものには徹底的な彈壓を加へるが、一方、裏面的に懷柔工作を行つて、この世界戰爭においてインドを手放さないやうにする、といふ從來からの硬軟兩樣の手を使つて行くだらうと考へられる。インドの反英獨立問題の實情は以上の通りであるが、これは

英國にとつては非常な頭痛の種である。吾々はますますインドの民衆を啓蒙すべきであらう。

濠洲——去る七月二十二日、日本軍はニューギニアのポートモレスビーの背面にあるスタンレーの反對側の海岸ブナ、ボナド附近に敵前上陸をして、この地點を確保し、七月二十五日には、海軍航空隊が、タウンスヴィルを初めて空襲した。八月七日から九日にわたつては、ソロモン第一次海戰が行はれ、わが海軍は別掲（四六頁參照）の如き嚇々たる戰果をおさめた。また、七月下旬から八月上旬にかけては、わが特殊潛航艇のシドニー奇襲、ニューカッスルの砲擊等はもとより濠洲の周邊地區にわが潛水艦の活躍が物凄く、これが直接濠洲に對して非常な脅威を與へるに至つた。濠洲はアメリカおよびイギリス本國に對して、濠洲が危險に曝されてゐることをしきりに訴へ、兵力の增援を要求し、これに對してアメリカは、九月上旬協定を結んで、この方面に對する軍事的援助

を強化することになつた。すでにアメリカの兵隊、飛行隊が日に日に濠洲に向つて送られてゐる。アメリカとしては、濠洲を將來の太平洋作戰の基地として、それへの補給連絡を確保すべく努力してゐる。そしてその妨害になる日本軍の航空基地等を奪ひ返さうといふのが、今後における敵の作戰の手のやうに考へられるのである。

カナダ——カナダは、本年七月に徵兵令を實施し、二十一歳から三十五歳までの男子を採用することとして、さかんに兵力の增强を行つてゐる。また、ソ聯に對する食糧の補給のために、九月八日、ソ聯と新小麥協定を締結した。

重慶

重慶の情勢判斷は、大東亞戰爭は長期戰であり、英米は二、三年後には必ず軍備を充實し、反攻作戰を以つて日本を壓服するから、その時に重慶としても

協力作戰に出で、一擧に支那事變を解決したいといふ大きな考への下に、依然として軍隊の整備訓練をつづけてゐる。今年の二月から八月までを第五期訓練時期とし、九月に蔣介石はじめ軍部の幹部連が各地を檢閲して廻つた。しかしながら、先般のわが揚子江南方の浙贛鐵道を中心とする大作戰をはじめ、相次ぐわが新作戰に、重慶としてはその防衞に寧日ない狀況であつた。重慶としては、今後日本がどういふ大きな作戰の手を打つであらうかといふ點に非常な關心をもつてをり、それを偵知するに日夜苦心努力してゐる有樣である。またビルマ・ルートがわが軍よつて徹底的に遮斷され、西南方面から海外に出るルートが役に立たなくなつたので、これが對策として今度は西北方面に政治的に經濟的に重點を置かうといふ着想の下に、蔣介石はじめ要人が乘り出して西北工作を進めてゐる。

重慶に對する列國の援助狀況としては、アメリカの空軍がアフリカを横斷し

インドに出て重慶に連絡してゐる。その飛行輸送をしてゐる物の量は、はつきりは判らないが、現在一萬噸内外ではないかと思はれる。飛行機もすでに百機内外のものを送つてゐる。將來これは漸次增加される傾向にある。支那にあるアメリカの空軍は、わが攻勢作戰によつてすべて奥地に避難し、そこで整備訓練を行つてゐる。最近時々わが占領地區の上空に姿を現はし爆擊をやつてゆく。

インドの反英獨立運動に對して、重慶は非常に關心を拂つてゐるが、今のところこれには深入りしないで、傍觀的態度をとつてゐる。

先般、新國民政府が法幣驅逐策を斷行したので、重慶はいよいよ金融の逼迫(ひつぱく)を告げ、公債の强制賣付けとか、中央銀行の强化とか、各種の對策に腐心してゐる。

これを要するに、重慶は軍事的にも、また思想的にも、全く弱つてしまつたと見ることはできないのであつて、米英と呼應して極力戰力を强化してゐるのである。經濟的には相當弱つてゐるけれども、これも支那特有の經濟組織とあ

の强靱(きやうじん)な生活力にものをいはせるであらうから、急に參るとは見られない。支那問題は依然として、大東亞戰爭遂行上の重要部面を占める問題である。

豫想される敵の企圖

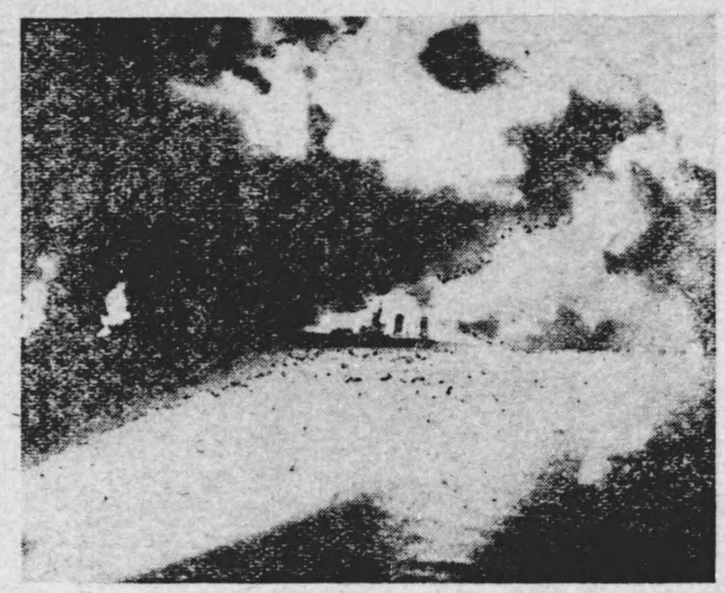
― 激化する太平洋爭覇戰 ―

今後の太平洋の戰鬪は、次のやうに推移するのではないかと思はれる。すなはち、近代戰は制空權の爭奪戰が中心であるから、**太平洋の爭奪戰も結局制空權の爭奪戰となるのであらう。**あの廣い太平洋において制空權を獲得するためには、現代の飛行機ではやはり航空基地をもつことが一つの絕對的條件である。そこで、この航空基地の爭奪戰が行はれることにならう。そのために、飛行機も活動するが、艦隊に護衛された陸上部隊が敵前上陸作戰を實施し、島嶼(たうしよ)の爭奪戰をやる。そしてわが護衛艦隊が小さな潛水艦や驅逐艦で成り立つてをれば、

向ふは大きな巡洋艦をもつて攻撃して來る。それに對して更にこちらは主力艦をもつて應ずるといふやうに、この島嶼の爭奪戰に伴つての海戰が各所に展開されるとみられ、日露戰爭當時の日本海々戰におけるやうに、主力艦隊の決戰によつて勝敗が一擧に決するといふ型よりも、これからは航空基地の爭奪戰を中心としての空、海、陸の決戰が各所に繰り返へされるであらうと思はれる。

更に制空權の外に潛水艦がある。太平洋の到る所に通商破壞戰を演ずるであらう。從來の制海權といふ言葉は、今日では制空權、海上制海權、水中の潛水艦に對する制覇といふ三つの立體的なものになつて、この三つが兼ね備はらなければ、完全に勝利を收めることはできないことになつたのである。

その實例は、最近の**ソロモン海戰**がはつきりこれを示してゐる。すなはち前述した八月七日の第一次ソロモン海戰を端緒として、アメリカは各地に反攻作戰を實施し、これに對し、わが軍も空・陸・海ともに反擊作戰に出で、各地で



戰海ソロモンるたゝ繰に史戰

激戰を展開した。

かくして、八月二十四日の第二次ソロモン海戰において、帝國海軍部隊は、敵の新大型航空母艦一隻を大破、同中型航空母艦一隻を中破、戰艦ペンシルヴァニア型一隻を中破といふ戰果をあげ、米の增援艦隊を擊攘したが、なほ、敵の反攻は執拗に繰返され、遂に去る十月二十五日の南太平洋海戰、ついで十一月十二日より十四日に亙る第三

次ソロモン海戰を展開するに至り、今なほ彼我の間に激戰が續けられてゐるのである。

去る八月七日、グアダルカナル島方面にわが軍が上陸して以來約四ヶ月、ソロモン海域の制海權爭覇戰こそ近代海戰の特質とみられるのである。すなはち、皇軍のグアダルカナル島上陸に對し、敵はこれを奪回せんと執拗な反攻が開始されたのである。當時制空權は敵方にあり、

わが軍は夜間驅逐艦等をもつて兵力を輸送し補給をしたのに對し、敵は晝間、優勢な飛行機の掩護の下に大きな船をもつて補給をしてゐたといふやうな戰況で、第一線の將兵は相當惡戰苦鬪をしたのであつた。

第二次ソロモン海戰以後の戰果、南太平洋海戰の戰果、また第三次ソロモン海戰の赫々たる戰果は、すでに大本營より別掲（四七—五四頁參照）のやうに發表されたが、今後もアメリカは南太平洋における制海、制空權の獲得を目指して執拗に戰ふものとみられるのである。

なほ、ソロモン方面に對する出擊と呼應して、北方においては去る八月八日戰艦、航空母艦、重巡洋艦四隻、驅逐艦十隻といふ極めて有力な敵艦隊がアリューシャン方面へ反擊を試みた。もちろんこれはわが海軍によつて擊退されたが、これらのことを見ても、敵がいかに基地奪回につとめてゐるかがわかるのである。

別表(1) 第一次ソロモン海戰の戰果

一、撃沈艦船

米甲巡 ウイチタ型 一隻(旗艦)
米甲巡 アストリア型 五隻(うち一隻旗艦 うち一隻轟沈)
英甲巡 オーストラリヤ型 二隻(うち一隻轟沈)
英甲巡 艦型 未詳 一隻(轟沈)
米乙巡 オマハ型 一隻
英乙巡 アキリーズ型 一隻
乙巡 艦型 未詳 二隻
驅逐艦 九隻
潛水艦 三隻
輸送船 十隻

二、撃破艦船

甲巡 艦型 未詳 一隻(大破)
驅逐艦 三隻(大破)
輸送船 一隻(大破)

三、撃墜飛行機

戰鬪機 四九機
戰鬪兼爆撃機 九機

本海戰における我が方の損害

飛行機自爆 二一機
巡洋艦二隻輕傷(但し戰鬪航海に差支なし)

別表(2)

大本營發表(二十七日午後八時半)

一、帝國艦隊は十月二十六日黎明より夜間に亘り、サンタクルーズ諸島北方洋上において敵有力艦隊と交戰、敵航空母艦四隻、戰艦一隻、艦型未詳一隻を擊沈、戰艦一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻を中破し、敵機二百機以上を擊墜その他により喪失せしめたり。

我が方の損害

航空母艦二隻、巡洋艦一隻小破せるも、いづれも戰鬪航海に支障なし、未歸還機四十數機。（註本海戰を南太平洋海戰と呼稱す。）

二、第二次ソロモン海戰以後南太平洋海戰直前まで卽ち八月二十五日より十月廿五日に至る間に於けるソロモン群島方面の帝國海軍部隊の戰果左の如し。

一、艦船

擊沈

米航空母艦　ワスプ

巡洋艦　三隻
驅逐艦　五隻
潛水艦　六隻
輸送船　六隻
掃海艇　一隻

大破

戰艦　一隻
航空母艦　一隻
巡洋艦　一隻
潛水艦　一隻
輸送船　二隻
掃海艇　一隻

中破

航空母艦　一隻

二、飛行機

撃墜　四〇三機

地上撃破　九十七機

その他、敵B―一七型、大型爆撃機十九機に對し大なる損害を與へたり。

我が方の損害

一、船艦

沈没

巡洋艦　二隻

驅逐艦　二隻

潜水艦　一隻

輸送船　五隻

大破

驅逐艦　一隻

輸送船　三隻

中破

巡洋艦　一隻

驅逐艦　二隻

潜水艦　一・隻

輸送船　二隻

二、飛行機

自爆　二十六機

大破　三十一機
未歸還機　七十八機

別表(3)

大本營發表（昭和十七年十一月十八日午後三時卅分）

十二日以來戰鬪續行中の帝國海軍部隊は十三日夜間ガダルカナル島敵航空基地を猛擊、飛行場及びその施設に大損害を與へ更に翌十四日敵機の猛烈なる反擊を排除しつゝ味方輸送船團を護送中同日夜間同島の西北方において戰艦二隻、大型巡洋艦四隻以上を基幹とする敵增援艦隊に遭遇、これと激戰の結果その補助部隊の大部を潰滅し戰艦二隻に重大なる損傷を與へこれを南方に敗走せしめたり、現在迄に判明せる十二日以來十四日迄の綜合戰果並に我方の損害左の如し。

一、艦船

撃沈		
巡洋艦	八　隻（内新型三隻 内五隻轟沈）	
驅逐艦	四隻乃至五隻	
輸送船	一　隻	
大破		
巡洋艦	三　隻	
驅逐艦	三隻乃至四隻	
輸送船	三　隻	
中破		
戰　艦	二　隻	
二、飛行機		
撃　墜	六三機	

撃破	十數機
戰艦	一隻沈沒
同	一隻大破
巡洋艦	一隻沈沒
驅逐艦	三隻沈沒
輸送船	七隻大破
飛行機	三二機自爆九機未歸還

【註】十二日以來十四日迄の海戰を第三次ソロモン海戰と呼稱す。

三、我方の損害

さて、太平洋作戰の大體の見透しとしては、本年は前述のやうな島嶼の爭奪戰が各地に間歇(かんけつ)的にくりかへされ、來年の前半期には、その數がもう少し多くなり、後半期になるとそれが更に本格化して、日本に對する航空基地の奪回戰

を逐次積極化してくると考へられ、**その頃には、吾々としても、すくなくとも百機位の敵機の編隊が日本本土を空襲するものと、相當強い判斷を加へねばならないのである。**

次は潛水艦の通商破壞戰であるが、航空機とともに潛水艦の發達は、海戰に非常な變化をもたらした。イギリスはドイツの十倍近くの優勢な海軍力を有つてゐるに拘はらず、今度の戰爭が始まつてから千七、八百萬噸の自國商船を撃沈されてゐる。この一例を見てもわかるやうに、潛水艦に對する防衛は非常に困難なものである。大東亞戰爭開始以來アメリカは帝國海軍のために潛水艦を三十隻位撃沈されたが、なほ百隻位をもつてをり。そのうち約四十隻は東亞方面に活動し得るものである。そしてこれが、アリューシャン方面の補給路の遮斷や、或ひは朝鮮と日本本土との連絡等を脅かさうとしてゐる。**アメリカは潛水艦の建造に非常な力を入れてゐるので、吾々は今後ますます敵潛水艦の跳梁**

を豫期し、對潛水艦方策に十分の用意をしなければならないのである。

以上の太平洋作戰に對し英支軍としてはビルマを奪回しようと努力するであらう。

以上は主に作戰的な方面だけの見方であつた。しからば經濟戰、思想戰的に敵のとるべき手段方法はどうか。

今度の戰爭で日本の獲得した戰果の樣に短時日の間にこれほどまでに大きな戰果を收めた例は世界史上稀なことである。日本の國力は實にすばらしいものになつた。これは滿、支、南方を見た人は、誰れもが感ずる。しかし一國の經濟力も、戰時においてはこれが戰爭經濟力として、有效でなければ價値を發揮しない。鐵が山にいくらあつても、これを堀り出し、これを運び、これを製鋼し、これを兵器なり、船なりにすることが出來なければ、戰爭の役には立たない。すなはち**生產力の戰爭**である。彼我共に今し血眼になつて生產戰爭をしてゐる

わけである。**經濟戰はこの生產戰を中心として展開されてゐる。**この點から米國を見ると慥かに大きな經濟力をもつてはゐる。しかし勞働力とか船舶とかの不足の度は、我れ以上であつて實質的には必ずしもこれが有效に戰爭能力に結びついてゐない。この點日本も決して安心してはをられないが、さりとて敵の物質力を恐れることはない。

思想戰的には長期持久戰の特質として、戰爭を國內戰爭へと導く工作が彼我の間に激烈に行はれる。これは經濟戰と結びついて、戰時國民生活の低下に伴ひますます深刻になる。共產主義者などの活動の好機會となる。この思想戰は國內に向つて行はれると同時に滿洲、支那、その他の外地の住民に對しても各種の手段方法でもつて行はれることはいふまでもないことである。

以上は、敵が今後とるべき戰法についての一つの觀察である。果してかういふ工合になるかどうかは豫斷を許さないが、これによつても、國內態勢の整備

の必要の度はいよいよ加はつて來たといへる。

樞軸側今後の作戰

今日まで赫々たる戰果を收めた日獨伊が今後いかなる戰法をとるかといふことである。日本はどこまでも獨伊と提携してますます積極攻勢作戰を展開するが、それについて、一、二述べて見よう。

その一は、敵に對する通商破壞戰である。

敵米英の分斷である。英は米の經濟力に、米は英の海上武力に依存して戰つてゐる。これは大西洋をもつて結ばれてゐる。この大西洋の航行を遮斷することが出來たならば先づ英を屈伏せしめることが出來るわけである。これは距離的關係から獨伊の擔任になることは當然である。その意味からして獨伊の通商破壞戰をみよう。

大東亞戰爭が始まつた當時、敵のもつてゐた船舶數は、イギリスが約二千百萬噸、アメリカが約千百萬噸、合計約三千二百萬噸であつた。そのうち今年の五月までに樞軸側において擊沈したものが千五百萬噸と見積ると、五月末現在において敵は一千七百萬噸をもつてゐるわけである。しかし、その二割はドックに入つて修理されてをり、殘りの千四百萬噸が常時使用されるものである。

敵米英がこの戰爭を遂行するためにどの位の船が要るかを推定してみると、まづ一千百萬噸位ではないかと思はれる。だからまだ三百萬噸の餘裕があるわけで、この三百萬噸を速かに擊ち沈めれば、敵に致命傷を與へることができるといふことになる。敵の造船能力は、月平均三、四十萬噸であらう。いま樞軸側で月に七十萬噸擊沈することができれば八ヶ月半で敵を參らすことができ、月に八十萬噸とすれば、六ヶ月で敵を參らせることができる勘定である。そこでこの七十萬噸なり八十萬噸の擊沈成績を擧げるといふことが、今日樞軸側にと

つては大きな問題なのである。最近は敵の警戒も非常に嚴重になつて、この成果を擧げることは漸次困難となつてゐるので通商破壞戰だけで敵を屈服させることは、非常に難しいことになつて來た。しかしながら、この成績を一年以上二年も續行したならば必ずや敵特に英國に非常な打擊を與へ得るとは確實である。

その二は反對に、日獨伊離間謀略工作に對する吾々の心得である。

米英を敵として西にヨーロッパ戰爭、東に大東亞戰爭が展開されてゐるが、日獨伊は一體となつて戰はなければ、日本ひとりで勝ちぬくことは極めて困難である。この日獨伊をば離間することが、敵としては武力戰に伴ふ一つの謀略思想工作の大きな着眼點であつて、それにはありとあらゆる手段方法を用ひてゐる。ヨーロッパにおいては、日本は大東亞戰爭によつて米英人を東亞から追ひ出し、東亞人の東亞を建設するのだといつてゐる。これはまさしく白色人種に對するアジア人種の挑戰である。したがつてヨーロッパにおいてお互に喧嘩

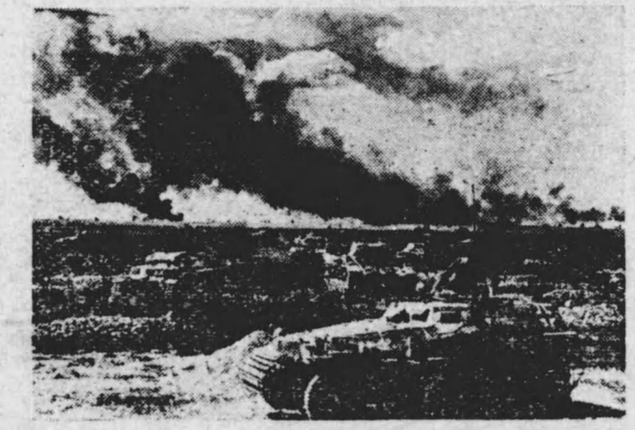
をしてゐては結局日本に東亞をとられてしまふことになると宣傳してドイツを日本から離隔しようとする。また日本においては、今はなるほど日獨伊樞軸同盟などといつてゐるが、やがてはドイツと日本とは戰爭するやうになるにちがひない、といふやうなことをいひふらし、結局ドイツ賴むに足らずといふ謀略宣傳をしてゐるのである。戰爭の現段階において、かういふことを口にすることは既にその謀略にかかつてゐることになる。今や世界は、日獨伊樞軸側と英米重慶の民主主義陣營との二大陣營にわかれ、死鬪を演じてゐる。勝つか敗けるか、死ぬか生きるかの、血みどろの戰爭をしてゐるのである。その中において味方同志を離間させるやうな言動をかりにもする者があるとするならば、その人は第三者的な考へ方の持主であつて、決して戰爭をしてゐる者とはいへない。かういふことは、吾々は絕對愼しまなければならないのである。つい最近の滿洲事變においては、日本は國際聯盟において五三對一で世界を相手

として戰つた。これは最惡の事態においては世界中を相手としても戰ふといふ決意と覺悟の表れである。しかし、好んでそれを吹張し、友とすべきものを敵とすることは、國家のために極めて不利である。わが國においては、特に知識層にともすれば親米英的な色彩が濃厚であるが、この點は特に注意をしなければならない。

獨ソ戰局の推移と日本

次に、獨ソ戰局の現狀とその推移、並びにこれが帝國に及ぼす影響についてその要點を述べて見よう。

獨ソ戰局——獨ソ戰局の推移は歐洲戰局の將來を決定し、世界戰局に大きな影響を及ぼし、やがて日本の北方對策にも重大なる影響を及ぼす問題であつて、わが國の官民は勿論のこと、世界が非常な關心をもつて注視してゐるところで



〔獨ソ戰線〕

獨機の猛爆擊により炎々と燃え上るソ聯軍事施設（右）

進擊する獨軍戰車部隊（下）

ある。これは決して他人事でなく、吾々の戰局であると考へて眞劍に檢討しなければならない。

現在、スターリングラードを中心として、獨ソ兩軍は死鬪に死鬪をつづけてゐる。戰勢はソ聯側に不利で、日に日に壓倒され、すでにその運命も決した形となつた。ドイツ軍の主力部隊はすでに北コーカサスの大部を占領し、ソ聯軍は北方正面において反擊作戰を實施したが、これは失敗に終つた。今後差當つては戰局に大なる變化なく、第二年の冬を迎へることであらう。今年の冬にかけて、ドイツ軍は更に南コーカサス作戰を進めてゆくだらうが、あの險峻な山脈を控へるこの作戰は、しかも黑海の制海權がまだ全くドイツの手に歸してゐない今日、相當の困難があることはもとより、時日もまたかかることであらう。

しかしドイツ軍本年の占領面積は、四十萬平方粁に上り、その中には重要な施設がある。ドンバスの工業地區、北コーカサスの農耕地、マイコープ（年產

二百五十萬噸）の油田もあり、グローズヌイの油田（年產四百萬噸）をも取ることが出來たなら、これは相當の戰果であるといはざるを得ない。それだけにソ聯邦の打擊は大きい。ソ聯軍は、千二、三百萬人を動員して、そのうち約三百五十萬の死傷、約三百萬の俘虜を出し、非常な損害を受けてゐる。飛行機、戰車は七、八割を失つたが、その後自國の生產と英米の援助によつて、大戰前の半數各五千臺位はもつてゐると見られる。しかしながら**スターリン政權の威令はまだ確乎不拔で、何等動搖の徵候を見せてゐない。**軍隊の士氣も依然維持されてをり、ドイツ軍の今後の攻擊が相當進展しても、それによつてソ聯がすぐ參るとは今のところ考へられない樣である。

かういふ工合に、獨ソ戰況が長引くことは、ドイツとしても對英作戰上極めて不利であるとも見られるが、しかし一面すでにソ聯には徹底的打擊を與へ得た今日、米英の攻勢に對しても十分手を打ち得る態勢にあると見られるのでヒ

トラー總統は、何とか早くこの戰局を打開して、獨ソ戰線を收拾しなければならないと苦心してゐられることであらう。

日ソ關係の將來—この問題に關聯して、日ソの關係が將來、どう動いてゆくかといふことである。

現在、ソ聯は極東方面に總兵力七、八十萬を配備してゐる。本年七月頃、若干の兵力を西方戰場に送つたが、八月中旬にはこれも中止した。飛行機も一千機、戰車も約一千臺、依然として配置してゐる。ソ聯側は獨ソ戰爭が日本に何かの好機會を與へたならば、日本はシベリヤに進擊作戰を實施するといふ情勢判斷の下に、戰備を嚴重にし、日本の軍事行動の偵知(ていち)にあらゆる手段方法を講じてゐる。

日ソの關係が將來どうなつてゆくかといふことは、吾々にとつて極めて大きな問題である。これは大東亞戰爭の戰局の進否如何にかゝると思はれる。二、

三年後に米英の軍備が充實して、攻勢作戰の餘裕が出來た場合においては、ソ聯もこれと連携して對日積極行動に出て來るかもしれない。

いま一つはドイツのソ聯に對する壓力が現在のやうに、極めて強い間はよい。がもしそれが弱つたならば、これがまた日ソ關係を惡化せしめる一つの原因になると考へられる。ドイツの作戰があまり進展しないので、或ひはドイツはすでに攻擊力を失つてゐるのではないかと、心配してゐる者もあるやうであるが、石油についてだけは困つてゐるやうであるが、その他の食糧資源、生產力といふやうなものについては、かへつて昨年よりも情勢がよい模樣である。

吾々としては、北方情勢に對してつねに關心をもち、軍に信賴し、しつかり準備を整へて、無言の壓力を加へることが最も賢明な策であると考へるのである。

三、大東亞建設の方策

建設の指導理念

まづ第一に、大東亞戰爭の指導理念であるが、これはすでに昨年の帝國議會において、東條內閣總理大臣から、はつきり示されてゐる。

わが肇國の大理想に淵源し、大東亞の各國家・各民族をして各々その所を得しめ、皇國を核心として道義に基づく共存共榮の新秩序、つまり東洋本來の家族的和親の團結體制を確立しようとするものである。

この「核心」の意味が深長なのであつて、共存共榮といつても、從來のデモクラシー的な民族論では決してない。日本が指導者—核心となつて東亞の諸民族

を率ゐていつてはじめて、東亞の諸民族が各々その所を得ることができるといふのである。これは、日本がさういふ美名の下に、從來の米英と同じやうなやり方をするといふことではない。東亞の諸民族の現在の能力から考へて、また大東亞戰爭を遂行するためにも、日本が中心となつて統一を保持し、各民族を指導し、啓蒙し、育成してゆくことが、日本に課せられた使命であるといふ、實際の必要から出てゐる理念なのである。

そこで、日本が中心となり、各民族が各々その能力を發揮して大東亞戰爭の遂行に協力してくれる體制が出來上らなければならない。それには、日本自身が東亞の諸民族の指導者としての十分なる資格を具へる必要があることは勿論であるが、同時に、東亞の各民族も亦よく大東亞戰爭の本質を知り、心から協力してくれないと困る。然るに現實はこの兩方ともまだ十分でないやうに感じられる。特に、一歩國外に出て日常生活の部面を見ると、日本以外の民族は、

まだまだ戰爭に參加してゐないといふ感じがする。考へ方によつては未だそれだけ餘裕があるからだともいへる。一歩國外に出れば、純毛や純綿の製品、吾々が不自由してゐる革靴、さては牛肉・豚肉・鷄肉といふやうに何でもある。これをちよつと見れば、外地の物資が豐富なことを物語るもので、結構なことのやうに一應思はれるが、戰爭の見地から見ると決してさうではない。もし外地が戰爭に參加してゐるならば、さういふ物資は相當統制され、消費節約が行はれてゐなければならないのである。吾々はすでに支那事變以來、物資の統制・節約・尊重といふことについてまことに貴重な體驗をもつてゐる。それだけに吾々は、國外の各地で御馳走を食ふたびに、吾々の妻や子、國内にゐる一億國民は今や日常生活の不自由を忍んで戰つてゐるのだといふ感じを、ひしひしと感じるのである。外地に物資がある間はよいが、これがやがて消耗し盡された場合にはどうなるか。外地民族は自ら製作する能力をもつてゐないから、まことに困つたことになるのである。**今から戰爭生活體制に導いてゆかなければその時になつて對策を施したのでは後の祭なので當局も苦心してゐるやうである。**

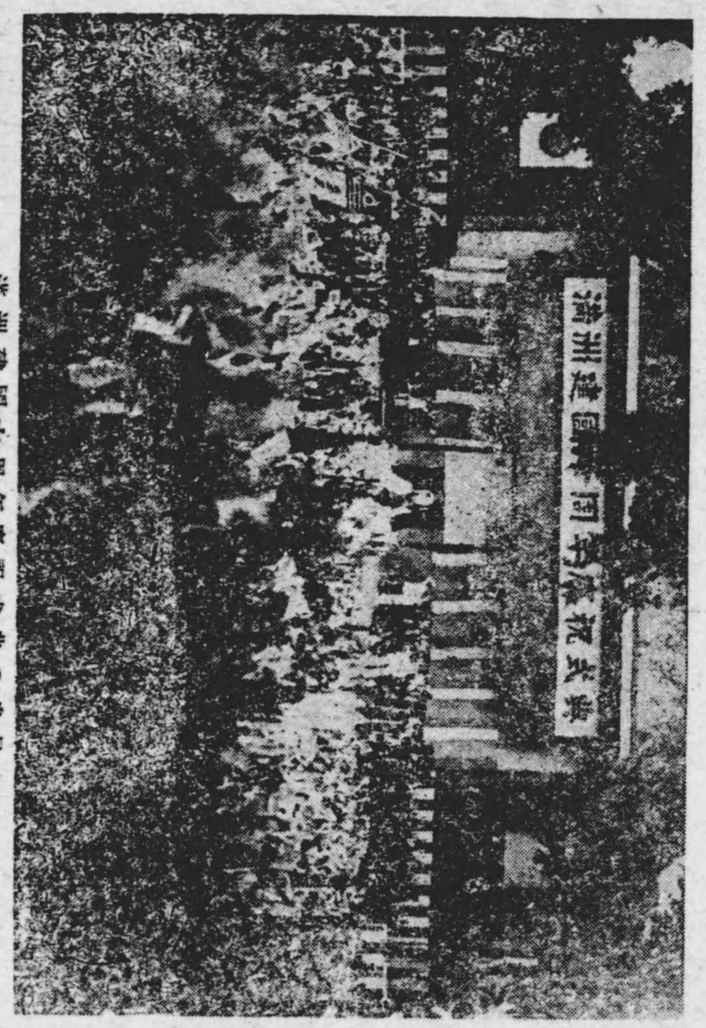
この戰爭指導精神は、單なる抽象的理念ではなく、現實の政治として着々實行にうつされてゐる。去る七十九議會において、内閣總理大臣は、その施政演說に、南方各關係民族についての具體的方策を堂々と中外に宣明した。それはフリピッンなりビルマなりの民族が、よく帝國の眞意を了解し、大東亞建設の一翼として協力した場合には、これに獨立の榮譽を與へるといふのである。**帝國の眞意を了解し、大東亞建設の一翼として協力する**の實を擧げることが、前提條件になつてゐるのであつて、慢然と獨立させるといふのではない。この各民族をして各々その所を得しめるといふ八紘一宇の精神は、今回の大東亞戰爭において始めて顯現せられたのではなく、すでに十年前の滿洲國の建設、ひきつづき支那事變における新政府の樹立等、すべてこの一貫したる精神に基づい

て實現してゐるのである。

大東亞各地域の價値と建設狀況

：滿洲國：

本年建國十周年を迎へた滿洲國が、國の基礎いよいよ固く、名實ともに獨立國としての內容を充實してゐるのは、まことによろこばしい次第である。大東亞戰爭開始以來、日本に對する信賴心は一層强化し、大東亞戰爭の一翼たらんとする實があらゆる方面に擧げられてゐる。**今日日本の經濟は、滿洲を離して**は絕對にこれを論じ得ない。すなはち日滿は不可分一體であるが、この精神を實行するためには、日本人が滿洲國に永住する必要がある。滿洲國は現在すでに四千三百萬の人口を有し、近い將來に五千萬となる。日滿不可分一體の實を



滿洲建國十周年慶祝式典の光景

擧げるためにはすくなくともその一割、五百萬の日本人が滿洲に住み、各方面に指導力をもたなければならないのである。さきに二十年間百萬戸の移民計畫が立てられたのも、かういふ國家百年の大計から行はれたのである。ところがその後支那事變が起り、更に南方問題が起るや、ややともすると北方に對する關心が薄らぐ傾向がある。これは、國家百年否千年の計から考へて見ると寔におもしろくない現象である。滿洲と日本との關係は歴史的に見ても極めて密接なものがあり、また滿洲の氣候風土は日本人の生活に最も適應してゐる。更に滿洲の經濟的資源は日本として離すべからざる重要なものばかりであり、それに前に述べたやうな北方の情勢から國防の見地からも滿洲は極めて重要である。政府が、人の不足で困つてゐる時期にも拘はらず、本年も相當の移民計畫・義勇軍派遣を實行することにしてゐるのはこの滿洲の重要性に基づいてゐるのである。

：新支那：

北支・蒙疆は、滿洲と同樣に、日本の國防上、國防産業上極めて重要な地方である。**我が國防産業の基礎をなす、石炭と鐵は、北支にあることを忘れてはならない。**更に中支揚子江下流の地域は、日本の支那に對する經濟的な見地からも、實に重要な地方であつて、この點は新政權においてもよく了解し、特に日本に便宜を與へるやうな協定が結ばれてゐる。

汪國民政府首席

大東亞戰爭勃發以來、國民政府はますます對日信頼心を增强してゐる。そしてその日本が米英と戰つてみごとに勝つてゐるといふところから、支那民衆の國民政府に對する信頼心も日に日に昂まつてゐる。特に、國民政府は、先般重慶の法幣に對する通貨戰にも勝利を得た。多年惱まされた舊法幣も一掃したのであつて、これが、國民政府の爾(じ)後の經濟工作を非常に容易ならしめるのである。

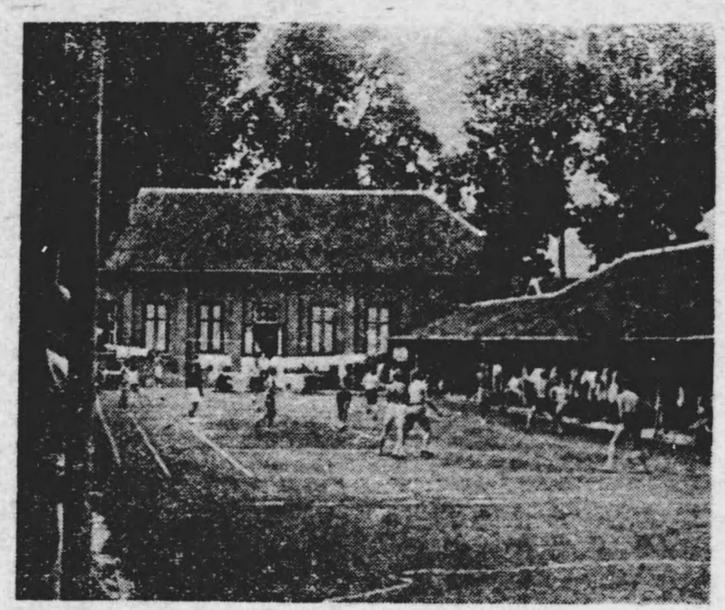
しかしながら、重慶は現在なほ三百萬の軍隊をもつて日本軍に對峙してゐる。日本は依然大陸の警備を續行し、經濟封鎖を强化してこれを壓服しなければ、支那事變の目的は達成されない。それに、この支那問題は、大東亞の各種の問題のうち一番大きな、一番難しい問題で、最後まで殘る問題である。最近わが國には南方熱が旺盛になつて、支那問題など、はや陳腐(ちんぷ)に屬し、聞くのも厭だといふやうな氣配があるが、これは大きな考へ違ひである。南方各地を廻つて見ても、華僑が到る所に發展してゐる。結局支那人は東亞諸民族の中では一番

しつかりした民族であり、吾々としては、これと手を握つてゆかなければ東亞の問題の解決はできないといふことを、痛感させられるのである。吾々は支那問題に對しては、終始一貫最高の關心をもつべきである。

：南方各地：

まづ南方における政治・行政の狀況であるが、南方各地に對しては現在軍政が布かれてゐる。この軍政の樣式も、各地の特性に應じて幾分異つてゐるが、その大方針としては、速かに治安を回復し、日本に必要なる資源を確保し、交通機關・行政機構を改革するといふ點に重點が置かれて、着々施設が進められてゐる。

マレー・香港或ひは**ジヤワ**には日本人を司政長官とする行政機構がほとんど完備してをり、**ビルマ、フイリッピン**も大體同樣であるが、その文明の度合、



バタビヤにおける濠洲兵收容所

生活程度ならびに從來のイギリスなりアメリカなりの施政のやり方に鑑み、ビルマではバーモ博士を長とする行政府、フイリッピンではヴアルガス氏を長とする行政府を組織させて、これを日本軍政の補助機關としてゐる。そして、各地とも、從來英米人が東亞人を全く奴隷視してゐたのに對し、有能な者はどしどし登用し、日本人はあまり末節に拘はらないで、重要な

ところにポストを占めるといふ方針の下に進んでゐる。

フイリッピンにはまだ若干の敗殘兵が横行してゐるので、地方行政組織も完全には行つてゐないが、やがて治安の回復に伴ひ、全部の地方に司政長官が置かれるであらう。さうすれば、南方各地域の行政組織が一應完備することになる。今日までのところは上部組織だけが頭揃へをしたわけであるが、今後は下部組織も次第に強化されることにならう。

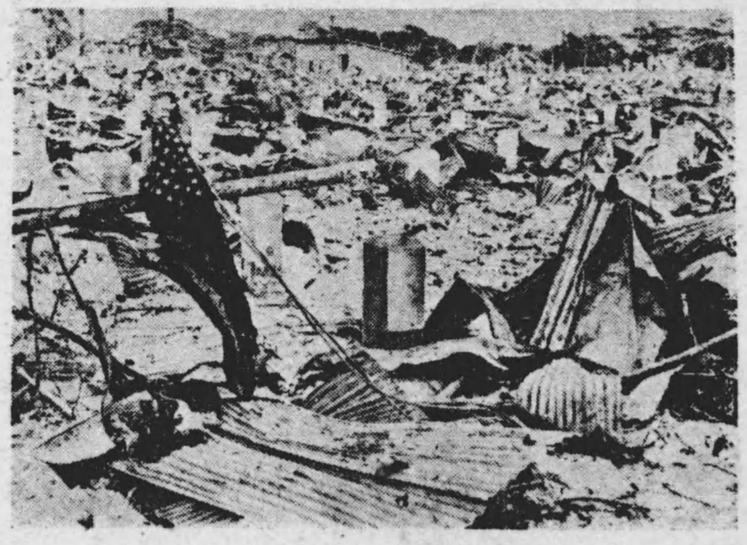
現在の軍政は極めて少い人で極めて大きな仕事をしてゐる。たとへば軍政監下の一部局である產業部をとらへてみると、これは日本の商工省に當る役所で、內に商工課とか鑛業課とか水產課とかいふ各課があるのに、日本人は大體課長級から上と、各課に屬官・囑託が一、二名、總員二十二、三名で、中央の商工行政をやつてゐるといふ實情である。各州では、更に人が足りない。司政長官以下十一、三人で、一州の行政をやつてゐる所が多いのである。したがつて、今後

復興する南方

↑○疾風のやうにマレー半島を南下した皇軍の前に今やイギリス東洋侵略の牙城星港も風前の燈となつた。天に冲する炎々たる煙は敵側破壞によつて燃える陸橋

←○復興する昭南市
ニューブリッヂ、ロード

○皇軍の保護のもとに復興するマニラ市街の一景(右)



○星條旗は地に墜ちた。比島首都マニラは陷ちた。わが的確な爆撃に廢墟と化した敵兵舎跡に泥にまみれた星條旗一旒「アメリカ」敗れたりの象徴をとゞめてゐる(下)

戰局が許すならば、ますます多くの行政關係の人が要ると考へられるのである。

次は、經濟開發の狀況である。

日本の必要とする物資は、日本の物動計畫の下に各地域に配當され、それぞれに開發が進められてゐるが、これは總括的に見て順調に進んでゐる。すなはちマレーにおいてはビンタン島のボーキサイトとか或ひは錫とかゴムといふやうなものに重點が注がれ、ジャワにおいては米の增產ならびにゴム・錫或ひは石炭の開發が進められ、ビルマにおいては鉛・亞鉛・ニッケル・コバルトなどの特殊金屬の開發が進められてゐる。大東亞に不足してゐる棉花の栽培も、ビルマで着々施策が進められてゐる。フイリピンにおいては、從來金を主なる生產物としてゐたが、金に代ふるに銅、その他鉛・亞鉛・ニッケル、それに米の自給、また棉花栽培に重點を置いて開發をしてゐる。

しかし何といつても最も大事なものは**石油**である。蘭印には平時〇〇〇萬噸、

ビルマには〇〇〇萬噸、その他合せて合計約〇〇〇〇萬噸の石油が、今まで南方で採れてゐた。この石油をば、破壞された設備を速かに復舊して、日本に必要なだけ運んで來なければならない。當局が當初豫想してゐた量よりははるかに多いものを取つてゐる。

大東亞戰爭以前において南方問題がやかましかつた當時、南方の資源を抑へれば日本の經濟上の多くの問題は解決されるやうに吹張されたが、現段階において日本が南方に期待してゐる物資は、輸送の關係上日滿支に南方を加へた總量の僅かに十分の一にすぎないのである。ただ南方にはゴムとか錫とかいふやうな特殊な物があり、それに石油があるので、そこに南方の重要性があり、魅力があると思はれるのである。重點は依然として滿支にある。

次に、**文化的な見地から見た南方の問題**を、一、二述べて見よう。

南方には、世界の文化がすべて存するのである。もちろん、マレー、ビルマ、

タイ、インドネシア、フイリピン等みな固有の文化をもつてゐたが、そこへ歴史の興亡爭奪戰によつて、いろんな文化が入つてきた。北方からは、支那の文化が入り、インドからは、宗教を中心とした文化が入つた。主としてヒンヅー教で、佛教はあまり大きな勢力を占めてゐない。その佛教も、日本の佛教とはちがつた、吾々のいふ小乘佛教である。その後から、回教の文化が入つてゐる。近世にいたつて、ヨーロッパ諸國がこれを領土としてから、佛印にはフランス、インドネシヤ方面にはオランダ、フイリッピンには先にスペイン、後にアメリカ、ビルマにはイギリスと、各國の文化が入つてゐるので、これら各地を廻つてみると各種各様の文化があるので非常にめづらしくおもしろく感ずる。しかも、南方固有の文化には、日本文化と相通ずるものがある。生活様式・服裝・食物その他住民の性格にしても、吾々と多く共通したものがあり、その點は支那とはよほど趣を異にしてゐると思はれる。吾々は、今後かういふ各種

の文化を、眞に日本文化に融合する責務があらう。

次に、**華僑對策**について、述べてみよう。

南方には、南支から移住した七百萬の華僑がゐる。最も多いのはマレー半島で二百二、三十萬、タイにも二百萬以上をり、その他各地に散在し、大都市は勿論のこと、どんな田舍にも居住して、主に商業を營んでゐる。さうして彼等は獨得の商業力をもつて各地に鞏固な地盤を築いてゐるので、南方の商業は華僑に牛耳られてゐるといつても過言ではない。それに、南方各地の住民は暑いせいか一般にお人好しで、商利商略、金儲け、損得といふやうなことについては、極めて觀念が乏しいので、結局支那人に牛耳られてしまふといふ現況である。日本軍が南方を占領する以前は、この南方華僑對策が日本内でも重要視されたが、今回日本軍が南方を占領してから、華僑に對しては峻嚴なる態度をもつて臨んでゐる。考へてみれば元來華僑は日本の敵である。

支那事變の間、援蔣資金を貢ぎ、排日抗日をさかんにやつたのも彼等であるから、これを敵として一網打盡にしても差支へのない道理であるが、日本としては八紘爲宇の大精神に基づき、彼等が大東亞戰の一翼として、眞に協力してくるならば、これを生かしてやるといふ大きな佛ごころをもつて扱つてゐる。

しかしながら、吾々がすでに支那事變で體驗をしてゐるやうに、支那人は同化しにくい民族であるから、嚴重なる監視をして、もし少しでも日本軍の命を奉せず、或ひは日本の國策に反するやうなことがあつたならば絶對に許さないといふ毅然たる態度をとつてゐるのである。現在では、華僑もよく日本軍の命に從ひ、誠意をつくして協力してゐる。したがつて、政治的には華僑問題はあまり大きな問題ではないと思ふが、經濟的には、將來もこれは大きな問題である。**日本の中小商工業の轉廢業者が南方に行つて商賣をしようといつても、大きな組織の下に出るならばいざ知らず、個人的に出て華僑と競爭をすることは、**

ほとんど成功の見込はないと思はれる。

次は、**俘虜の問題である。**

大東亞戰爭によつて、日本は約三十萬の俘虜を獲得した。その中には各國人種がをり、現在各地に俘虜收容所が設けられて、極めて少數の日本軍が監視監督をしてゐる。各收容所を廻つて見ると皆正しく待遇されてゐるが、こゝでは各民族の特性がよくわかつておもしろい。彼等が大東亞戰爭に對して共通に抱いてゐる考へ方は、現在は歐洲戰爭が進展してゐるために本國の力を東亞に持つて來ることができず、日本にもろくも敗れたけれども、歐洲戰爭が終つたらその時は別だ、といふのである。日本軍に對しては、從來日本といふものをあまり研究して居らなかつたが見なほしたと一樣にいつてゐる。大東亞戰爭前まで彼等は南方の要職にあつて住民を搾取し、立派な邸宅を構へて日々の生活をしんでゐた。ところがさういふ邸宅が全部日本軍の管理するところとなり、

その前を彼等は毎日勞働のために往復してゐるのである。**戰前彼等は夢にもかういふことを豫期しなかつたにちがひない。**吾々は俘虜の現狀を見るにつけ、戰爭に敗けたならばかくも恥曝(はぢさら)しをし、悲慘な目にあふのかとしみじみと痛感させられるのである。

× × ×

以上の日滿支、南方だけでも、日本の約十倍あり、その中の住民は十億に近い。それに印度洋、太平洋を加へると、大東亞といふ吾々の活躍範圍は實に大きいのであつて、吾々の從來教育を受けたやうな知識や考へ方では、到底これを律することができない。

東亞全地域を一通り廻つて、痛感するのは、今日の日本人は大東亞の日本人にならなければならないといふことである。今日の文明の利器飛行機をもつてすれば、この廣い大東亞も三日か四日でその果まで行くことが出來る。東京を

ゴム林の中に民家に似せて造つた英軍兵舍

朝出發すれば、晩には臺北に着く。二日目の晩には西貢(サイゴン)に着く。三日目の午前には昭南島に着き、四日目にはジャワに着く。フイリッピンならば、東京から二日間で行ける。滿洲國の新京も一日で行ける。これを一度廻ると見解が廣くなつて細かい問題にあくせくしないやうになるであらう。吾々は長い間小さい箱庭教育を受けてきたので、急に大きくなることはできないだらうが、今後大東亞の建設をしてゆくためには、吾々自身がまづ大きくなり、今の十倍の頭をもつことが必要である。

四、重要な我が戰力の昂揚

前章では大東亞建設の大方針と特に南方の狀況について、ややくわしく述べたが、次に今後日本としてはこの戰爭をいかにして遂行すべきかを述べよう。

もちろん今次の大東亞戰爭は、先般の第七十九回帝國議會において、總理大臣から戰爭指導方針としてはつきり示されてゐるやうに、日本としては日滿支、南方をば作戰の基地としてますます戰力を培養し、米英に對して積極作戰を展開し、これを撃滅するまで戰ひぬかなければならないのである。**そこで日本の戰力をいかにして昂揚するか**戰力の現狀はどうかといふ點について、極めて概要を述べてみたいのである。日本の戰力については、周知のやうに、防諜の關係上、すべて國家機密の扱ひになつてをり、吾々の得心のゆくやうに、はつきり述べ得ないのは甚だ遺憾であるが、それは行文の精神を汲んで忖度していただきたい。

一、人的國力の現狀

—兵力の推移—

この十一月二十八日の徴兵令發布七十周年記念日を機會に吾々はいろいろなことで、人的國力のことをくわしく知つたが、日本の人的資源の問題でまづ考へられることは、**日本の兵力が將來いかになつてゆくか**といふことである。前に述べたやうに、陸軍としては大東亞の地域を確保して敵に侵されず將來の情勢に備へ、海軍としては單に太平洋・インド洋ばかりでなく、世界を股にかけて米英の大海軍と制海權の爭覇をするといふことになると、これに要する兵力

は實に厖大なものである。しかしながら、これはすべて徴兵によつて得るのであつて、おのづから限度がある。特に、日本の今日においては、子供は多いが、遺憾ながら壯丁が非常に少いのである。周知のやうに、今日では壯丁の大部分が現役兵として採用され、御奉公をすることになつてゐるが、その數は決して充分とはいへない。この點、ドイツなどは惠まれてゐる。そこで、目下の戰爭任務を達成するためには、現役者には相當惡い體格の人も採用され、しかもそれが長期にわたつて服務しなければならない。四年、五年の長きにわたることは勿論であつて、この狀況は、こと二、三年は改善されるとはみられないし、新しい戰局が展開される事になると、更にこれが窮屈になつてくる。したがつて、**いやしくも日本男子であるならば、崇高なる兵役に服する責務があるのであるが、大東亞戰爭の前途は、自己の半生といふよりもむしろ一生を、軍人として國家に捧げることを要求するのである。**そこを、吾々は今までより

もよほど深刻に考へなければならない。

—勞力の推移—

次は、**勞力方面から見た國力**であるが、現在軍需生産に從事してゐる數百萬人の中年々四、五十萬づづ自然消耗をしてゆく。これを補充するに、今日では學校卒業者或ひは女子をもつてしてゐるが、前に述べたやうな敵の軍備擴充に對抗してゆくためのわが軍需生産のためには勞力が非常に不足である。**それに現在わが國の勞務の實情は、遺憾乍ら能率が非常に低下してゐる。**その原因は資材の不足であることとか、最近の食糧の統制强化が勞働に影響を及ぼしてゐることとか、或ひは勞働時間の關係、賃銀の問題等、いろいろあるが、一つには、大東亞戰爭開始以來戰況があまり順調に進展してゐるために經營者や勞務者がともすれば精神の緊張を缺き、自分のやつてゐる仕事が戰爭遂行にいかに

重大なる役割を占めるかといふことをしつかり意識しない所に原因があると見られるのである。戰爭をやるからには、あらゆる方面が窮屈になつてくることは覺悟の上である。吾々はそこを押し切り、精神力を更に強化して進まなければならない。**精神を緊張、强化させれば、今の資材をもつてもなほ一割なり二割の增産をきつと期することが出來ると考へられる。**いま例を一の軍需生産にとつていへば、一萬噸の鐵鋼を造つたならば、約五百臺以上の戰車が出來るのである。生産能率の昂揚といふことは、目下政府がやつきとなつて强調してゐる點であるが、以上の關係をよく了解して、一層の努力をしなければならないと思ふ。

—人口の推移—

その次は人口の推移である。**大東亞を建設し、日本民族が指導者となつてゆ**

くためには、現在の七千萬の人口ではどうしても足りない。大東亞の各地に日本人が行つて指導をしなければならないのであるから、大和民族をどんどんふやすことが必要である。ところが、大正以來の傾向は、年々若干づつ人口增加率が低下してゐる。特に支那事變において十數萬の戰死者があり、これがまた人口增加に一大支障を來してゐる。それにまた、戰爭に伴ふ國民生活の低下が、人口增加率減少の一つの大きな原因をなしてゐるのである。これでは、いかに口で大きなことをいつても大東亞の建設は期し得られない。そこで軍においても、作戰上許される限り兵員を交替させて、人口增加を圖つてゐるほどである。從來、唯物、金權思想の旺盛なりし時代には、子供をつくると貧乏人の子澤山で苦勞するからできるだけ子供をつくらないやうにと、特にインテリ社會においては避妊の傾向すらあつたが、今日では全く情勢が一變して、**子供は國家の寶であり、女は子供を多く產むほど國家に御奉公することになる**といふやうに考

へ方が變つてきた。これは實に喜ぶべき現象であるが、國家としても衞生方面、教育方面の施策によつて、更に安心して子供をつくれるやうに徹底した政策を進めなければ、大東亞の建設はいふべくして行はれない。

以上、人的方面の日本の國力の推移を極めて大摑(つかみ)みに概觀したが、戰爭の前途を考へると、これは斷じて樂觀を許さない重要な問題である。これが對策としては、朝鮮、臺灣等の外地の人にも、兵役義務の範圍を廣め、また各種の勞務に動員し、一方女子勞力をますます利用するやうに施策が進められてゆくと思ふが、その根本においては吾々は子供に對する觀念、人口增加の必要の認識をば一新しなければならないのである。

二、物的戰力の現狀

その二は物的戰力である。日本が米英を敵として戰ふにいたつた原因は前に

述べたやうに政治的に、思想的に種々あるが、近代の國防の要素である國防資源が遺憾ながら日本になく、しかも米英がABCD包圍陣によつて一齊に經濟封鎖を加へ、日本を經濟的に殺さうとするに至つて、日本としては國家の存立と國民生存の絕對的要求が阻まれ、つひにやむにやまれずして起つたといふのが、その一つの大きな原因である。幸に陸海軍の奮戰によつて短期間に南方を占領することができて、今日大東亞にある資源をもつてすれば、戰爭の前途には全く不安なく、米國の對日經濟封鎖も全くの夢物語になつた。吾々は一大光明をもつて、戰爭に當ることが出來るのである。だがここで考へなければならないことは、今わが國內の一部のものが考へてゐるやうに、占領したこれらの資源が直ちに戰爭に役立ち、または吾々の日常生活に利用し得られるかといふと、實情は決してさうでないといふことである。否、反對に向ふ二、三年は軍需の要求から、一層苦しくなることが明かである。

この點はよく理解されなければならない。

石油——まづ最も重要な石油から述べてみよう。日本は年に數百萬噸の石油を必要とするが、その八割をアメリカ、一割を蘭印、その他をイラン、イラク方面から輸入して、やうやく賄つてゐた。日本内地には石油は僅かしかなく、北鮮・滿洲の石油・人造石油まで合はせても少量に過ぎなかつたのである。ところが、アメリカは石油を賣らない。困つて蘭印に交渉したが、蘭印もなかなか應じない。軍には石油のストックはあるが、これも時間の問題である。そこで大東亞戰爭となつて、日本は南方の石油資源を手に入れたのである。しかし敵もその施設を一應全部破壞してゐた。ただ、この破壞が徹底的でなかつたのと、日本軍の進擊が非常に急速であつたために、初め吾々が豫想してゐたよりも多くの量がとれ、豫想の約十倍といはれてゐるのである。しかしそれでもつて、はや石油の困難が打開されたと考へるのは大變な間違ひである。一方戰爭によ

る消耗を考へれば、この量ではまだまだ十分とはいひ得ないのである。戰時には平時の二倍、三倍の石油が要る。現在南方で得てゐる石油の量は全需要の一部分に過ぎないのであつて、絶對に樂觀を許さない狀況にある。それにこれを運ぶ船（タンカー）が日本に少い。目下さかんに建造してゐるが、これはさう急速に多くの數を整備することはできない。また航空揮發油は重油から極く僅かしか採れないので、非常に多量の重油を使はなければ航空機の消耗量が得られないのである。さういふ關係で、今年から明來年くらいまでは、石油は一層苦しくなるであらう。結局民需の方を切り詰めざるを得ないことになるのである。從つて國内における石油は更にその姿を沒し、これが吾々の日常生活の上にいろいろに響いてくるものと考へなければならないのである。すなはち更に交通が不便となり漁獲が低下し、或ひは野菜の運搬が思ふやうにできないといふこともあり得るであらうが、これは現時の情勢としてまことにやむを得ないこと

である。これが對策を實施しなければならない。

鐵鋼——次に、軍需の中心である鐵鋼について考へてみよう。日本の鐵鑛石は、大體において滿洲、支那、南方すなはち海外から大部分を輸入してゐたのである。それに必要な石炭(粘結炭)もやはり滿洲、支那、南方から輸入してゐる。國防上最も重要な鐵と石炭が海外から輸入されてゐるといふことは、イギリスなりアメリカなりドイツなりにくらべて、日本の國防上の一つの不利な點である。日本の船腹が海外から數千萬噸の物資を輸入するとすれば、その約六、七割は鐵と石炭である。そこで鐵の生産は石炭に關係し、石炭はまた船に關係するといふことになる。それに、從來の日本の製鐵法は、アメリカから輸入した屑鐵によつて製鋼してゐたのであつた。ところが、アメリカが日本に對する經濟封鎖の一つの手として、屑鐵を輸出しなくなつたので、屑鐵を使はない銑鋼一貫作業をしなければならなくなつた。屑鐵を使ふ場合には、一噸の鐵を造

るために、四百キロの石炭でよかつたのが、銑鋼一貫作業の場合には數倍の石炭が要ることになつた。しかもそれはすべて海外から持つて來なければならぬ石炭であることを考へれば、如何に鐵の生産が困難になつてゐるか大體見當がつく筈である。

海軍としては、アメリカの大建艦計畫に對應して、航空母艦なり、潛水艦なりをどんどん整備しなければならないし、陸軍としても、大陸、南方の情勢に對して機械化部隊を增强しなければならず、火砲も整備しなければならないのである。その上生産擴充といふ基礎的な方面においても、どんどん工場設備を擴充し機械を整備しなければならない。鐵道、通信方面でも、設備の傷んだところを修理する鐵が必要である。民需としても、農村の鋤、鍬が必要である。それを振當てる當局者の苦心は、到底關係外の者の想像を許さない所である。ところが、遺憾なことには、最近この鐵の生産高も低下してゐる。さきに述べ

たやうに、一萬噸の鐵でも戰車五百臺以上といふ多大の軍需生産ができるのであるから、その生産が低下するかしないかといふことは、軍備充實に大きな影響を及ぼすのである。鐵の增産のため、官民ともに大いに奮勵努力して貰はなければならない現狀である。

船舶――次は、造船である。大東亞の各地域を結ぶのには、船が必要である。大東亞戰爭を遂行し、共榮圈を維持するためには、約二千五百萬噸の船が必要であると、專門家はいつてゐる、ところが、現在日本にある船舶は、それには遙かに及ばない。特に必要なのは貨物船であり、次にタンカーである。これを得るためにあらゆる努力が拂はれてゐるが、さきに述べた鐵に制限をされ、海軍の建艦に制限をされ、更に他の各種の資材がないために制限をされて、計畫どうりにはなかなか運ばない。それに、造船方面でも勞働能率が低下してゐる。そこにもつてきて、船ぐりも完全な能率を發揮してゐない。

以上、代表的な石油・鐵・船舶についての生産の狀況を述べたが、この事情は他の物についても大體同樣である。吾々は大東亞の資源を十數萬の尊い犧牲を拂つて得たが、それがまだものになつてゐない。ものにするには大いに吾々の努力奮鬪を要するのであるが、現狀はむしろ戰果に醉ひ、このままで戰爭がうまく行くやうに考へて本務に精勵せず、それがために能率が若干低下してゐるといふことは、餘程考へねばならない所である。敵であるアメリカはこの頃漸く本氣になつてどんどん能率を向上してゐるといふとき、その反對の現象にあることは何といつても殘念なことである。

米――次には、吾々の日常生活に最も重要である米の狀況について述べて見よう。今年は、內地は幸ひ天候に惠まれて、豐作であつた。先般發表になつたやうに、その豫想收穫高は六千八百五十萬石である。これは昨年の五千五百萬石にくらべて、一千三百萬石の增加である。しかしこれで米の困難も打開でき

たらうと考へることは危險である。今年は朝鮮が不作であり、結局、持越米を昨年より多く減らしても、外米を昨年同樣に輸入しなければならない計算になつてゐる。これには青少年に對する增配・人口の增加といふやうな積極的な對策も含まれてゐるが、いづれにしても、內地の豐作も國家全般の見地から見ると、これで事態が改善されたといふわけにはゆかない。これに關聯して、最近玄米食運動が行はれ、陸軍省でも日々實施してゐるが、非常に榮養になる。

畏くも　天皇陛下におかせられては、前からこれを御實行になつてゐると漏れ承はつてゐるのである。

以上、物と人兩方面ともに、わが國力は前途決して樂觀を許さず、吾々はますます緊張して困難を打開しなければならないといふ結論になるのである。

五、死活戰に對するわれ等の覺悟

最後に、死活戰に對する吾々の心構へについて、簡單に述べておきたいと思ふ。

國防上の要求は、今後ますます大きくなる。とにかく戰爭には勝たねばならない。戰爭に敗けたならば、吾々の幸福はあり得ない。家庭もなければ親兄弟もないのである。これは最近南方を廻つて、つくづくさう感じさせられるのである。たとへばバタビヤには數萬人のオランダ人が住んで、立派な邸宅に入つてゐたが日本軍が攻略すると、その一令の下にそれを開放し、みづからは着のみ着のままで、收容所に收容されてしまつたのである。寢具も茶碗も箸も一切をそのまま置いて、家を後にしたわけである。吾々はまことにありがたい國土

に生れたために、さういふ敗戰の體驗を知らないですむのであるが、**ともすれば、日本の國柄の有難さを打忘れ、國家がどうあらうと自分さへよければいいといふ利己的な考へに墮し易い傾がある。**闇取引が横行するのもそれである。

吾々は絶對に敗けることは出來ない。戰爭に勝つか、或ひは死ぬか、途は二つしかない。

吾々は何としても、武力戰を中心としてあらゆる戰爭に勝たなければならない。それがために吾々われの生活が低下し、不自由になつてもそれはやむを得ないのである。厭だといつてゐては、戰爭には勝てない。そこに吾々の考へ方を透徹させて、吾々の日常の生活問題を考へなければならないのである。とかく、吾々は戰爭をしながら戰爭の圈外にある氣持を持つのが惡いのである。

第一線の將兵は遠く故郷を離れ、一身一家をうち忘れて御奉公してゐるが、內地にゐる者はさういふことを知らないですむため、どうかすると戰爭的な考

へ方・困苦缺乏に耐へてゆくといふ考へ方が少くなつて、ああでもないかうでもないと議論をする。これは非常な戰爭意識の不足であつて、今後吾々の生活には更に困難が增してくるのである。恐らく今の生活が一番よかつたといふやうに思ふやうになるのであらう。一億總國民の戰ひだといふことが抽象的にいはれてゐるが、**それがこれから現實に吾々の生活に深刻に響いてくるといふことを、考への基礎に置いて、吾々の戰時生活態勢を眞劍に考へ直さなければならない時期が迫つてきたのである。もちろん具體的に、いかなる方法をもつてするかといふことが難しい問題であるが、ただ吾々の考への基準を從來のうかうかしてゐた氣持から引放し最惡の事態を基準としてこれに備へなければならないのである。**

『附　錄』

◎東條首相訓示（十一月十三日地方長官會議ニ於テ）

今回特に地方長官の會同を催したのは、主として行政簡素化の實施と戰爭態勢の强化とについて諸官一段の奮勵を求めんとする趣旨に出でたのである。政府は今夏以來行政簡素化の實施、大東亞省の設置及び內外行政の一元化につき鋭意力を致し過般これ等の手續も完了してその實施を見るに至つた。行政簡素化の實施も大東亞省の新設も、更にまた內外地行政の一元化も、すべて國策の樹立及び遂行の一切を、大東亞戰爭の目的完遂の一點に集結せんとする大方針より出でたるに外ならぬ。惟ふに行政處理の方法についてはなほ未だ戰時に適應せざるもの少からず。中央、地方を通じ徹底的に刷新を圖るの要があるのであるが、就中直接民衆に接すべき地方の第一線行政においては事を處斷するに一層迅速なるを期し、人に接するに一層親切なるを期すること等格段の改善を要するものがある。政府が今般敢て官廳員の減員を行ひ戰時に適應すべき行政の簡素化を實施せんとするものは一に戰爭に勝たんがためである。諸君はよくその趣旨を體し、この上一層の熱意と工夫とを行政實施の上に用ひら

れんことを私は要望してやまない。この機會において私はなほ諸官に對し二、三事項に關して特に要望し中央、地方一致協力一體となつて戰ひ抜かんことを期したいと存ずるものである。

第一　生產力の擴充

今や帝國は廣大なる地域海域に亘りいよいよ大兵を擁して曠古の大作戰を續けなければならない。隨つて軍需資材の要求は莫大なる數量に上り、これが基底を成すべき國防生產力は劃期的擴充を必要とするに至つたのである。一方緖戰に大敗を喫したる敵國はその資源と生產力とを恃んで漸く反擊態勢の整備に狂奔するに至つた。これに對し帝國は我が戰略的優位を活用し、三千年來傳統の攻擊精神を發揮し、飽くまで敵を索めてこれを擊滅する方針を堅持してゐるのである。固よりこれがためには如何なる情勢に際會するも磐石不動の必勝の態勢を確保し、かつ絕えずこれを强化すると共に常に敵に對して我が自主的方策を執り得るやう戰力を擴充せねばならぬのである。しかしてこれが實現を期するためにはこの際生產擴充に從事する指導者及從業員の深刻なる時局認識について不十分なる點なきや。國內產業經濟體制において相互の間に連絡を欠くが如きことなきや。更にまた各種施策の未だ徹底せざる

により國民の潑剌たる氣分を抑壓し、ために能率の低下を來せることなきや等につき各方面において更に反省して改むべきものあらば直にこれを改め實行すべきは直にこれを實行せねばならぬのである。戰爭遂行のためには個々の面目に執着するが如き平時的の考へ方は一擲し是なりと信じたる方向に即時邁進すべきである。今や國内における各般の機構及び運營は超非常時的事態に即應し、生産力の急速增强に重點的に結集せらるるを要するのであり、しかもその斷行は既に一日を爭ふ事態に到達してゐるのである。諸官が更に率先陣頭に挺身して國民の格段なる緊張を促すと共に、生産能率發揮のため各般の施策の實行に遺憾なからんことを望む。

第二　交通運輸の問題

戰爭遂行力增强の成否は一に交通力特に海上輸送力の如何にかかつてゐるのである。申すまでもなく戰爭遂行上必要なる物的國力の維持增强の爲には極力現有輸送力の能率向上により、船腹の不足を補はねばならぬのであり、これが爲には海陸運輸の增强に關して拔本的對策の强行と徹底的重點輸送の實施とを特に必要とするのである。力の及ぶ限り政府の施策の實行に協力せられたい。

第三　食糧問題

本年度の稻作は幸にして豐作であつたが、明年度における大東亞全體の需給を考へるときはなほ大いに努力を要するのである。從つて食糧增産及びその供出督勵と食糧節約の對策とは依然緊要であるから、諸官の格段なる勉勵を望むものである。

第四　物資の節約及國民精神の昂揚並に國民貯畜の增强

南方建設は現地軍政の活潑なる活動によつて目覺しき進展を遂げつつあるのである。就中液體燃料の開發取得は豫定以上急速なる進展を見つつあるのである。しかしながら輸送等の關係よりして國内民需液體燃料の需給狀態は當分の間更に窮屈さを加ふべきことを免れ得ないのである。當分の間は物資不足を覺悟しなければならない。且つ軍需優先充足の見地より一般民需は更に徹底的節約を必要とするのであつて、全國民が必勝の固き意思をもつて如何なる不自由をも堪へ忍ぶと共にあらゆる工夫を凝して國内産業の振興に當り、またその生活を簡素にするの要があるのである。これと同時にいよいよ國民貯蓄の增强を圖り、戰力培養に資せねばならぬことは更めて申すまでもない所である。ここにおいて諸官は潤澤ならざる日常生活物資につき最大限度の圓滑配給と合理的活用とに大いに力を致さるると共に國民貯

蓄の奬勵に一層の努力を加へられねばならぬ。

最後に官紀の嚴正なるべきことは時の如何を問はず今更言を俟たない。戰爭下において官吏の職責は殊に重大であり、國民の信賴を得るを要すること今日より大なるはない。しかるに近來官吏の中に私慾に迷ひ操守を忘れて官紀を紊し、ために法網に觸るる者をも見ることは大いに戒めなければならない。また戰爭遂行に當つては特に機密保持の緊要なることこれまた言を俟たぬ所であつて戰爭の進展に伴ひいよいよその言動について自重する所がなければならぬ。現在帝國は正に國家の隆替を賭して大戰爭を遂行してゐるのである。

今やわれわれの直面してゐる時局は論議を必要とする時代に非ずして一にも二にも實行をもつてすべてを處理して參るべき時機なのである。重ねて申すが今や日本は必勝の基礎の上に立ち前途に輝かしき光明を抱いて堂々と戰つてゐるのである。しかしてこの基礎の上に眞に有終の美果を收むることはわれわれ一億國民の大使命なのである。私はここに切に諸官の奮起を要望して已まないものである。

◎東條陸相訓示（前　全）

一、現時期の重要性に就て

大東亞戰爭開始以來中頃までは緒戰期にして今次戰爭の第一期とも稱すべく、戰略據點と經濟要域とを確保すべき時期であつたが、御稜威の下、南は帝國領土の四倍半に及ぶ南方諸地域を我が掌中に收め、北はアリューシャン方面の要地を攻略し、以て戰略的、政略的優位の態勢を確保し得たるとは洵に幸とする所である。しかして現下においては帝國の優越せる態勢を飽くまでも利用して積極的作戰を敢行しつつ我が綜合戰力を急速に增大し、以て米英との一大決戰を準備すべき一刻千金の貴重なる時期に相當するのである。即ち將來敵を擊滅し得るや否やは一に全國民がその精神を最高度に昂揚すると共に、現在の時を活用して最大能率を發揮し速に物的戰力の强化を實現すると否とに關すと存ぜられるのである。

二、軍需生產に就て

戰爭規模の擴大に伴ひ今や帝國陸軍は南は廣大なる新占領地よりタイ、佛印、支那大陸を經て北は滿洲及びアリューシャンにわたり長遠實に二萬數千キロに及び戰線において或は熾烈

なる戰鬪を交へ、或は治安、討伐に任じ、或は又警備、防衛及び作戰準備に專念しある狀況であつて、これら部隊の戰力の維持、培養のためには尨大なる軍需を必要とすることは贅言を要せざる所で、その生産は一刻も忽にすべからざるものである。殊に航空戰の激化の現情に鑑み航空戰力の飛躍的增强は焦眉の急に迫られてゐるのである。

固より陸軍關係の軍需生産能力はあらゆる努力を傾倒してその發展を圖りたる結果、飛躍的上昇を續け實に隔世の觀があるのであるが軍の要求を未だ充足するに至らず、今後一層量質共に改善向上を期することが肝要と存ずる。

しかして軍需生産向上の途はその基礎たるべき國防基礎産業の振興に俟つ他なく重要物資の生産にして急速なる增强を實現し得ずんば如何に軍需優先、重點兵備に徹底すると致しても、目下陸軍が企圖しつつある戰爭完遂に遺憾なき軍備計畫の圓滑なる遂行を望むことは出來ない。熟々惟ふに基礎工業の所望の如くならざる原因は輸送勞務の需給、資材資金の不圓滑等いろいろあらうが、これ等の困難を克服し生産を擴充する原動力は實に人に存するのである。即ち生産に從事する者は上下擧つてその能力を最大限に發揮することこそ本難關を突破する最大の關鍵であると信ずるのである。戰時中においては十分なる技術、勞務者の數的

充實を期し得ざるを以て、最も緊要なることは國民をして時局の眞相を把握せしめ勤勞報國の精神を振起し生産能率の增進を圖ることであつて、私の各位に期待する所もまた實にここに存するのである。

三、必勝の信念に就て

戰爭は彼我國民の意志の衝突、信念の爭鬪であつて、その勝利は敵の意志を擊碎しその信念を破壞したものに歸するのである。戰面の擴大、軍事科學の進歩による戰爭形態の變化に伴ひ、彼我の戰勢は波瀾曲折、今後益々多岐複雜となることが豫想せられるのでこの間に立つて國民は飽くまでも軍を信賴し終局の勝利に邁進する牢固たる信念がなければならない。しかるに最近國民の一部にはややもすれば米英の宣傳に乘ぜられ、それ等の物質的威力に內心不安を感ずる者無きにしもあらずであるが思はざるも甚だしと申さねばならない。

抑々國家戰力は統帥指揮、軍隊の精强、國民の團結特に戰爭意志物的威力、地理的戰略態勢等の綜合であるが今や帝國は何一つとして斷じて彼等に劣れるものはない、就中緖戰の成功により敵側に對し相當有利なる態勢を確保し得たことは洵に力强き限りである、從つて一億國民があらゆる困難を甘受し、生産面の急速增强を强行しもつて國家戰力を更に强化する

においては、米英の屈服を促進し戰勝の獲得をより迅速ならしめ得ることを固く信ずるものである。かくて國民一人々々の最高度の努力の總和の上にこそ眞の必勝の信念が生まるるのである。この點に關し格段の御指導を願ふ次第である。

四、防空に就て

現下戰勢の推移を判斷するに、大陸及び太平洋方面よりする敵機のわが本土空襲は遂次頻繁の度を加へ來ることが豫察せらるるのである。固より陸軍は海軍と緊密なる協同を保ち外、敵航空根據地及び敵航空勢力の破摧に努めると共に內、防空戰備の充實を圖りつつあるが、航空の特質上敵機のわが本土への侵襲は當然覺悟せねばならない。從つて防空の完璧を期するためには軍防空にのみ依存することなく、軍官民齊しく防空の戰士たることを自覺し益々民防空の充實整備に邁進することが肝要である。翻つてわが國防空の現狀を見るに不備、欠陷少からず。特に戰時生產の維持運營、空襲下における國民生活の確保等の對策において十分ならざるものがあるので、これが重點に徹底し急速にこれが整備改善に着手せられ速に防空必勝の態勢を確立せられんことを切望する。

これを要するに現在は各方面においてそれぞれ活潑なる作戰を敢行しつつ、しかも將來行

はるべき本格的決戰の準備をなすべき極めて重要なる時期である。今や全國の一人々々が戰場にありといふ氣魂を以てあらゆる障碍を克服して、現下最大の要請たる生產擴充に向ひ邁進し國家戰力の躍進を期すべき秋である。しかしてこれが實現のためには各位の陣頭指揮に俟つ所多く、今後一層の御盡力を切望する次第である。終りに臨み大東亞戰爭以來銃後國民が軍に寄せられたる眞摯熱烈なる御後援御協力に對しては感激のほかなく、この機會に各位並に各位を通じて全國民に對し深甚なる感謝の意を表する次第である。

昭和十七年十二月十日初版印刷
(三千部)

米英の反撃と大東亞決戰

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社
振替東京六〇八〇五番
行　大政翼賛會出版部
振替東京二〇八〇三番
行　東亞研究會

製本控

917 函	427 號	昭	二	三

米英の反撃と大東亞決戰

備考

(出文 あ36)
不許

昭和十七年十二月十日初版印刷
昭和十七年十二月十二日初版發行（三萬部）

（出文協承認號 あ360090）

不許複製

米英の反擊と大東亞決戰

定價金四拾錢

編纂者　竹田光次（タケダミツジ）

發行者　東京市神田區駿河臺四丁目二番地
翼賛圖書刊行會
右代表者　下中彌三郎

印刷者　東京市京橋區銀座西二丁目三番地
三協印刷株式會社
東東五九　高橋郁

東京市神田區駿河臺四丁目二番地
發行所　翼賛圖書刊行會
日本出版文化協會會員番號一三八五〇八番
振替口座東京四三六八〇番

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

917
427

大政翼賛會
國民生活動員本部　森崎善一著

戰時生活の建設

B6判一〇八頁
定價三十錢
送料四錢

大政翼賛會生活動員本部にありて國民生活指導の衝にあたられる筆者は豐かなる知識と貴重なる經驗からして、戰時國民生活の建設の急務を說く、隨所に具體的事例を引用し日本的生活への反省と建設について現下國民の心構へと向ふべき所を簡潔平明に叙して一般の理解を容易ならしめてゐる。

主要目次

生活の根本的究明、生活と戰爭
生活と政治、大東亞戰の本質、
大東亞戰爭と敵性ユダヤ、あくなきユダヤの對日謀略、外十編

醫學博士
大政翼賛會宣傳部編
菅沼清次郎著

必勝の生活戰

B6判一二〇頁
定價二十錢
送料四錢

われわれはドイツよりも強くあらねばならぬ。大東亞戰爭勃發以來連戰連勝の戰果を收めつゝあるも、戰はこれからである。この時ドイツの總力戰體制はもつて他山の石となすべきものが多くありはしまいか、第一次大戰後のドイツに在りて親しく見聞した筆者は愛國の赤誠に燃え銃後必勝の國民生活を各分野に亙り科學的に說く國民必讀の書。

主要目次

ドイツ國內の總力戰、敗戰國人の無自覺な生活、アメリカ民族の危機に對する警告、日本人としての新理念と新體制、外七編

發行所　東京神田駿河臺四ノ二
振替東京四三六八〇　翼賛圖書刊行會

3914
TA59